The History of

The National Association of Underwater Instructors

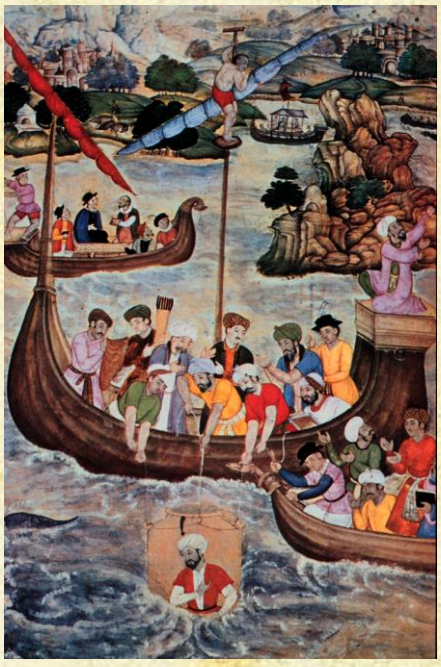
by Albert A. Tillman (NAUI #1)
and
Thomas T. Tillman

【序文】

水中世界という未知の世界へ挑戦をしたのは、人類よりも、セイウチのような動物たちが先でした。初めて水中世界に飛び込み、水中での遊びや仕事をする人たちには残念ながらエラというものはなかったのです。

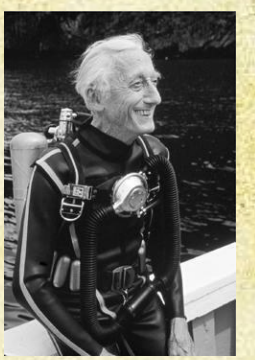
水中世界への冒険は、アレキサンダー大王がいた紀元前332年には、すでに科学調査の一環として行われていましたが、ダイビングにおける黄金時代といえるのは、20世紀半ば、アメリカで新しいスポーツがはじまりだした頃です。

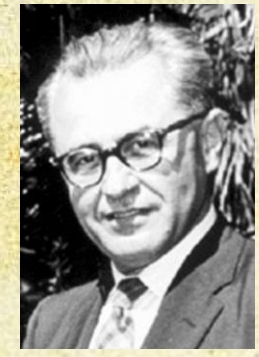
好奇心旺盛な先駆者たちは、間に合わせの道具を使って海に向かいました。木板のフィンやコーヒー缶のマスクなど、先駆者たちが考え出したアイデアは、SF作家でさえも想像できないでしょう。



アレキサンダー大王
（アクレサンドロス3世）
古代ギリシャのマケドニア王国に
生まれて帝国を築いた偉人

こうした想像力を働かせていた時代は、アクアラングという器材を開発したジャック・イヴ・クストーとエミール・ガニヨンの2人によってターニングポイントを迎えました。





ジャック・イヴ・クストー（左）とエミール・ガニヨン（右）

その一見大したことのない器材は、1949年にカリフォルニア州ウエストウッドにあるルネ・ブッソスが経営していたスポーツ用品店（後のUS Divers、現アクアラング社）で販売され、すぐにアメリカにおけるダイビングのスタイルを大きく変えることになったのです。

冒険好きなスキンダイバーたちは、この新しい発明品を「真のスポーツ」であるスキンダイビングを補うためのものとして使用しましたが、スキンダイビングとそこで必要とされる肉体的な技量に対して誇りをもっていた先駆者たちは、アクアラングを追加の支援が必要な「軟弱者」が使用する道具と考えていたのです。

ルネ・ブッソス

アクアラングにより、水中世界は、強靭な肺をもっていなくても、誰にでも訪れることができるようになりました。この利便性の高さから、ダイビング経験のない多くの男女、子供たちがダイビングを行うようになり、こうした無秩序なダイビングの広がりが、人々にとって危険なものになると予見できた数少ない先駆者たちは、優越感に浸ることなく、ダイビング教育を大衆に広めることを決意したのです。

これはそういった活動を行った人々、特に最も信頼されている指導技術をもつ人々（NAUI）の記録であり歴史です。本書を読んでいくうちに、ここに書かれている大部分が、NAUIの最初の10年間を詳細に記述していることに気づくでしょう。これらの草創期といえる年代はNAUI形成の基盤となるものでした。「NAUI」の歴史という物語は決して完結することはありません。なぜなら、NAUIインストラクターとダイバーたちが、日々新しい歴史をつくり上げているからです。いま、本書を読んでいる皆さまがNAUIの歴史を振り返って楽しみ、そして、これからも将来にわたってNAUIに新たな歴史を追加できることを願っています。

ここで記載されている出来事は、往年の記録を可能な限り再現しています。しかし、その中には実際に体験した人々の記憶とは、必ずしも一致しないものもあるかもしれませんが、ここで紹介する多くは、先駆者たちの記憶によって語られていたということをご理解ください。

ゼール・パリーと私（トム・ティルマン）の父であるアル・ティルマンの優れた功績、また多くのダイビングの先駆者にインタビューを行い、価値のある記録を残すことができたことへ感謝いたします。そして、多くの人々が先駆者たちの冒険と経験を記憶してくれることを切に願います。

皆さまにこのNAUIの歴史をお楽しみいただき、NAUIの並外れた歴史の背後にいる人々へ思いを馳せていただければ幸いです。

トム・ティルマン

ゼール・パリー（左）とトム・ティルマン（右）

【本文】

「ただそれを口に入れて普通に呼吸をするだけだ。でも浮上するときに息を止めてはいけない。なぜかって？そんなこと知らないよ！」

スクーバ装置を説明する際に、最初に交わされた言葉はこのようなものだったかもしれません。NAUIが組織される以前の時代、ダイビングインストラクターの指導方法は「器材を装着して海に飛び込め」というような状況だったと、ウォルト・ヘンドリック氏は言います。息をこらえて潜るスキンダイビングであろうと、スクーバによって呼吸が可能であるダイビングであろうと、人々はその仕組みについて、ほとんど無知の状態でした。ただ、その未知なる部分もダイビングの大きな魅力の一部だったのです。

当時、水中世界の先駆者たちの前には、誰も訪れたことのない広大な水の荒野のような世界が広がっていました。この時代の人類にとって、水中世界は宇宙よりも謎に満ちた世界だったのです。航海に出た人々の間では「海には魔物がいる」と決まり文句のように語られた時代です。

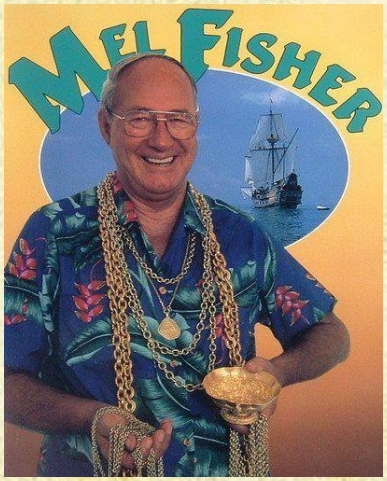
しかし、そのような数々の話があっても、ダイバーにとって水中世界は、人工的な器材を使いさえすれば明らかに到達可能な新しい領域でありました。明らかではないことは、私たち人類が何百万年もかけて獲得してきた生存本能や行動パターンを、水中世界に行くことで突然変えなければならないということでした。たとえばダイバーには、水中で緊急事態が発生して、体内でアドレナリンが分泌された際、息を止めたり横隔膜を緊張させたりする生理的な条件反射を抑えるトレーニングが必要です。空気がなく、分厚い水の層の下に閉じ込められていると考えるだけで、心拍数は上がってしまいます。水面まで肺を傷つけずに浮上するには、決して呼吸を止めないことが必要なのです。

アメリカにおいて、スキンダイビングは、スクーバダイビングよりも先に人気を集めたスポーツでした。20世紀半ばのアメリカでは、スキンダイビングはある程度の技術と身体能力を必要としましたが、知識はそれほど重視されていませんでした。「セイウチ人間」という言葉が、スポーツダイバーとして危険を冒し水中世界に最初に挑んだ人間にふさわしい言葉かもしれません。

1950年代初頭、スキンダイビングが隆盛を迎えた時代であり、それと共に「バブルマシン」と呼ばれた「Self Contained Underwater Breathing Apparatus:自給式水中呼吸装置（SCUBA）」が登場しました。スキンダイバーたちはフィンやマスクなどの器材を使い水中世界を自由に、とても気楽に楽しんでいました。新しい器材の出現は、新たに学習することをためらう旧来のスキンダイバーたちの目には異様なものに映りましたが、スクーバを使ったダイビングには、学習が不可欠でした。

1943年にスクーバが登場したとき、スキンダイバーたちはそれを簡単には受け入れませんでした。逞しいスキンダイバーたちは、新しい器材としてスノーケルを手に入れたばかりで、更に多様な器材を導入する準備ができていなかったのです。「マウスピースをくわえて、呼吸をするだけ」という説明は一見簡単に思えましたが、初期のアクアラングに付属してきた説明書は、それより少し詳しいだけで、販売員からは器材の説明などなく、漠然とした励ましのようなものだけでした。

メル・フィッシャーが経営するアクアショップは、1時間でできるトレーニングを宣伝していました。彼は、トレジャーダイバーとして成功した幸運なダイバーの1人でもあります。初期のスキンダイバーマガジンに掲載されていたNAUIコーナーの中で、「世界最高のインストラクター、チャーリーおじさん」が紹介されました。チャーリーおじさんは実在する人物でしたが、ここでは往年の知識を次世代の若者たちに伝える年配者たちの象徴的な人物として扱われていたのです。



メル・フィッシャー

スキンダイビングが登場したとき、それは奇妙なスポーツとして扱われました。観客も、対戦相手も、スコアもなく、ただ水中世界へと飛び込むだけのスポーツなど考えられるでしょうか。

奇妙かつ大胆で、実践するには器材の使用方法を習得する必要があり、深い場所へと潜らなければならないスポーツだったのです。1930～1940年代の先駆者たちは、それでも海へと向かいました。

チャーリーおじさんたちは、試行錯誤しながらダイビングをはじめた最初の人々であり、彼らはスイミングの過換気（ハイパーベンチレーション）や圧平衡などの技術を導入し、ダイビングのために自家製の器材をつくりました。彼らは失敗を重ねながらも、経験から多くのことを学んだのです。多くの困難に直面してきた彼らにとっての会話は、同窓会で必ず語られる言葉で「あの頃よく死ななかったよね」というものでした。

アメリカ海軍水中破壊工作部隊コロナドトレーニングセンター通称UDT（US Navy Underwater Demolition Team Coronado Training Center）の壁には、新入隊員の行動を戒める目的で、「必要な経験を全て終える頃には...君は生きてはいないだろう」と書かれています。

UDTロゴ

1950年代にスクーバが普及しはじめると、チャーリーおじさんは再び知恵の伝達のために登場します。そこではインストラクションの方法や、おじさんの壮大な物語『巨大なシャチが現れた！』などが語られました。偉大なチャーリーおじさんでさえ、ときには指導のためにレギュレータを逆にしてしまうこともあったのです。

当時、スキンダイビングは、同好会の時代でもあり、ダイビング愛好者たちをつなぐ、最もよい方法だったのです。おそらく、スリルのあるスポーツを他の人と経験することで恐怖心が和らぎ、また、同好会での海辺のバーベキューや、ボートダイビングのための集金などの活動も容易にできたのでしょう。同好会の共有器材が用意されていたり、場合によっては1つのアクアラングの器材を順番に使ったりすることもできました。

チャーリーおじさんは、フリーランスのインストラクターではなく、同好会のダイブマスターとして正式に任命されたのです。彼はスクーバに関する情報を、経験者や記録から可能な限り収集しました。

1951年、アメリカにおいて影響力があったと思われるスキンダイバーマガジンのタイトルに、SCUBAの文字は含まれていません。スクーバという言葉は、スキンダイバー初期の時代には、文章の中にさえ登場しませんでした。地域ごとの取り組みで、スクーバの説明書は存在していましたが、スクーバを使用したダイビングの技術について、公式に広く認められたものはありませんでした。主な情報源は堅苦しい軍隊用の出版物で、最先端のマニュアルは、アメリカ海軍のものでした。

初期のスキンダイバーマガジン

民間用のダイビングマニュアルはそこから抜粋されたものであり、その堅苦しく難しい内容が、一般ダイバーが手にすることができる唯一の情報だったのです。公的な機関が出版した説明書であったことや、スクーバが戦争をとおして生まれた器材だったという観点から、そのマニュアルに異議を唱えることなど、当時は考えもしませんでした。

同好会は地域ごとに結成され、年長者たちがこれまでの教育内容を体系化し、ダイブマスターはこれまでの経験から共通の理解を得たスクーバについての知識と技術を学び、有効かつ統一されたマニュアルをつくりはじめました。それは、アメリカにおいて最もダイバーの多かったロサンゼルス郡が、最初のダイビング教室を開催したためでした。南カリフォルニア地域には広大な海岸線と島々が点在し、主要なダイビングエリアが多く存在しています。

1952年、ロサンゼルス郡の公園管理責任者のもとに、郡のスポーツ部門理事であったアル・ティルマンから手紙が届きました。そこにはここで行われている新しい水中スポーツについて、ライフガードの配置されていない水域で、スキンダイビングを行う人々や、奇妙な呼吸器材を使って潜る人々への安全への配慮から、指導の必要性が記されていました。

この簡単な手紙は、結果としてその広大な海域を有する世界最大の公園地区が大衆のスクーバダイビングへの関心の中心となることを予見するものとなったのです。

○○○――

～全てのはじまりとなった手紙～

1952年6月10日

アル・ティルマンより
ポール・グリュエンダイクへ

『スキンダイビングクラスについて』

新しいスポーツ、スキンダイビングの人気がこの地域で高まっています。ここ最近、パロスベルデス地域でダイビングをしているときに、技術的に不十分なダイバーを何度か見かけました。その中の1人は、新しい水中での呼吸が可能な器材をもっており、研究のために私はそれを買い取りました。

パロスベルデス地域はライフガードの監視対象外のエリアで、事故が発生した場合や、郡が積極的な対応を行わない場合、重大な問題となる可能性があります。この活動はスポーツに分類されるので、私の部門がこのスポーツに参加し、トレーニングのための教室を開くことを提案します。私はダイビングの人気がより高まると確信していますし、私たちにはスポーツを安全なものにする義務があります。近いうちに、郡主催のトレーニングプログラムについて、話し合いを行いましょう。

（N. S. ジョンソン、チャック・ボリンガーにも目をとおしていただくため送る）

――○○○

確かにダイビングは風変わりなものでしたが、水中のスポーツと呼べるものであり、アメリカではよく知られていたロサンゼルスライフガードサービスは、海とプールで行う活動については彼らが管理すべきだと考えていました。

ロサンゼルスライフガードロゴ

幸いなことに、スポーツ管理部門と水中活動部門には十分な親交と互いへの理解があり、共同での取り組みが行われることとなったのです。

しかし、問題はまだ残っていました。教育内容についての決定権を誰がもつかということです。チャーリーおじさんと同好会のダイブマスターにはじまり、政府の公的機関が管理を行いはじめるなど、ダイビング愛好者の中にはこうした動きに不満をもつ人たちもいました。ダイバーたちは海での自由な活動を好んでいましたが、今後は行政が行う枠組みの中での活動となり、彼らは今まで楽しんでいた何かが壊れてしまうように感じていました。その感覚は正しかったかもしれませんが、規則のない活動では多くの命を奪う可能性があったのです。

ロサンゼルス郡は一定の権威をもつ機関を取り込むためにスクリップス海洋研究所に目を向けました。海洋研究所では、先駆者の1人であるコンラッド・リンボウにより非公式なスクーバ講習が開催されていました。1960年7月、コンラッド・リンボウの突然の死を受け、スキンダイバーマガジンはその内容を報じるとともに彼を「アメリカ随一のダイバー」と称したのです。この時代は素晴らしい先駆者たちが多く活躍した時代でした。コンラッド・リンボウは調査用の器具として、スクーバのトレーニングを科学者たちに行っていました。

スクリップス海洋研究所ロゴ

また、スクリップス海洋研究所の同業他社であるウッズホールもスクーバを用いた研究を行っており、もう1人の先駆者であるデイビッド・オーウェンによる本も出版されていました。ロサンゼルス郡は認定を受けさせるために、2人の担当者をスクリップス海洋研究所に派遣しました。1人はライフガード部門のベブ・モーガン、もう1人はスクーバの可能性を見出したスポーツ部門のアル・ティルマンです。もう1人、ラムシー・パークスも、自費でこのトレーニングに参加していました。ベブ・モーガンとアル・ティルマンは、毎週火曜日に水中スポーツに関する全ての領域について学んだのです。

トレーニングでは、スクーバ、スキンダイビング、怪我の応急処置、海洋生物、水中写真、水中爆発物、スピアフィッシング、ボディサーフィン、サーフィンなど、様々なトピックが取り上げられました。1954年4月12日、アル・ティルマンは、彼とベブ・モーガンが受けていたトレーニングについて考察したメモを、チャック・ボリンガー宛に送りました。そこには以下のように記載されていたのです。

「私たちの部門では水中に関する分野に精通した人材なしでは何もできません。これまでのところダイビング、スキンダイビング、スピアフィッシングなどの水中

スポーツは、一部の人々のためにつくられたスポーツだと言えます。このスポーツの成長は驚異的で、他のスポーツよりも人気が高まっており、当然ながら多くの制約がありますが、ダイビングの成長を見逃すことはできません。」

2人の代表者は、ダイビングにおける指導の核となる部分を学びました。ベブ・モーガンはロサンゼルス郡ライフガードトレーニングマニュアルの方式に従って、ダイビングの基礎コースのマニュアルを作成し、1954年の夏、第1回目となるスキン、スクーバの両方を含めた教室が開催され、成功を収めました。

第1回目の教室で以下の2つのことが明らかになり、スポーツ部門の管理下にあったロサンゼルス郡のこのプログラムは、この時点ですでに様々な変更を必要とすることとなったのです。

1）想定よりも多くの人々からの関心があり、郡が用意できる以上のインストラクターが必要になるということ。
2）スクーバダイビングはスキンダイビングよりも人気が高まるということ。

対応策は、インストラクタートレーニングプログラムの開催です。1955年春、ロサンゼルス郡は最初のインストラクター認定コースUICC （Underwater Instructor Certification Course）をカリフォルニア州リンウッドにある屋内水泳プール（Natatorium）にて開催。そのコースには、ダイビング器材メーカーの代表者や、同好会の代表者、海洋研究者、後のNAUIにおける重要な人物などが参加していました。

コースの内容は、教育とダイビングの分野において信頼を寄せている人々で構成された顧問委員会によって承認され、20時間を4回に分けて開催されました。参加者は、初心者の集まりではないので、コースにたくさんの知識と経験値をもたらし、そしてダイビング教育における歴史を今まさにつくり出そうとしていたのです。

ロサンゼルス郡が開催する水中プログラムは様々な方向へと成長します。多くのコースが生み出され、そのうちの1つの主要なコースは、毎年10週間にわたり開催されました。より魅力的なコースにするため、参加者用マニュアルの「Underwater Safety（水中安全）」は「Underwater Recreation（水中世界の楽しみ）」へ改定され、一定の基準を設けた指導者用のマニュアルも作成されました。ロサンゼルス郡のプログラムは、アメリカの他の州の見本となり、また1950年代後半には多くの経験からスクーバに関する基礎的な情報を有するようになっていました。元々はスキンダイビングへの関心から生まれた教育は、急速にスクーバダイビングの補助的な役割を果たす立場へと変わっていったのです。

同様のプログラムの開催を希望する多くの地域から、支援を求めてロサンゼルス郡に問い合わせが殺到しました。それらの希望に対応するため、全国規模のNational Underwater Provisional Certification Program （全国水中仮認定プログラム）が、アル・ティルマンによって構想されましたが、公的機関が州の境界を越えた活動を行うことは、政治的な禁忌だったのです。それでも他の地域の出身者の何名かは、郡の暫定インストラクターとして認可されました。郡は認定した全ての参加者について、その後の指導状況や継続状況の確認を行うための追跡調査を行い、また継続的な技能向上のために、再認定プログラムの開発を行ったのです。

ボストン、ワシントン、シカゴ、マイアミ、テキサス、シアトルなどの郡も、地域ごとにインストラクタートレーニングプログラムを設立するために努力をしていましたが、行政機関との結びつきによる固い基盤と多くの経験をもつロサンゼルス郡には遠くおよびませんでした。

それは他の地域の見本でしたが、それよりも重要なことはロサンゼルス郡のプログラムが、国内外においてダイビング指導の基盤として整備されたことです。後に組織されるNAUIの根幹はこうしてできあがっていったのです。

NAUIはロサンゼルス郡のプログラムの中で形成されはじめており、NAUIの主要な設立メンバーは、このプログラムの出身者たちでした。また、公的な認定は他の地域でも行われはじめており、赤十字はスキンダイビングとスクーバダイビングを、公的な水中安全プログラムに組み込むことを検討していましたが、あまりにも大きな事業であることから1958年に計画を見送りました。同年、YMCAは中央機関をとおして既存の水中プログラムに付随させることができる公的プログラムを開発し、更には全国各地に多くの屋内プールを所有していたにも関わらず、問題は各地域のYMCAの高い独立心でした。彼らの多くは、YMCA本部の開発したプログラムではなく、地域のダイビングショップや地域ごとの教育プログラムを導入していったのです。

また、YMCAはトレーニングを行う認定機関として週末に活動を行いましたが、それはロサンゼルス郡の充実したコース内容には遠くおよばなかったためうまくいかず、その後もYMCAの制限されたコースは、NAUIのコースにおよぶことはありませんでした。

それぞれの機関が独自のプログラムを最良とし活動を行っていましたが、全米中から最高のインストラクターを集め、認定インストラクター向けの国家規模の基準をつくるために、それぞれの代表であるインストラクターが対面してコースを開催する時期に差しかかっていたのです。

民間旅客機の普及は、ダイバーが遠くのダイブサイトへ出かけることを容易にしたのです。それは、ダイビングにおける指導が従来の地域ごとの状況に合わせたものではなく、認定されたダイバーが、様々な地域や環境でのダイビングに対応できるような指導に変更しなければならないことを意味していたのです。これは、普遍的な基準と技術への信頼があってこそ可能な事業でした。

1960年暑い8月対面でのコースが実現し、自らをNational Association of Underwater Instructors （全米水中インストラクター協会）と呼んだその新興組織は、テキサス州ヒューストンにおいて、その後数十年にわたりダイビングインストラクターを育成する様々な機関の基準となる1週間のコースを開催しました。

□ HOUSTON 1960年

ダイビングの発展に最も影響を与えた出来事はなんだったのかとダイバーに対して尋ねると、それぞれの体験にもとづいて答えはまるでポップコーンのように次々と飛び出していきますが、中でも1960年のヒューストンにおけるNAUIコースが必ず1度か2度は話題にあがってきます。

1960年のヒューストンにおける初のICC（Instructor Certification Course：インストラクター認定コース）

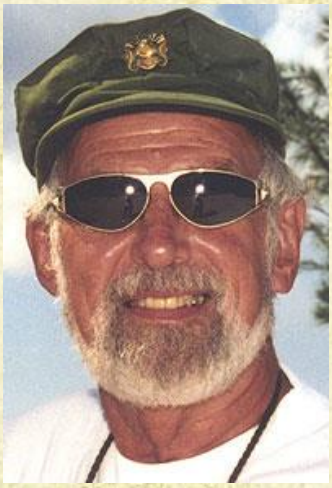
1960年8月20日～26日、スクーバを自らの専門と自負するメンバーが、蒸し暑いテキサス州ヒューストンの当時最新鋭だったシャムロックホテルのプールに集まりました。空の旅の普及、全米水中インストラクター協会の大会、インストラクター同士の対面でのコース開催案などが運命づけられたかのように集い、この1つのコースが開催されたのです。宿泊費は当時の金額で1泊3.5ドル、参加者は4人部屋に滞在。コース参加費75ドルには、インストラクション、タンク、プール利用料、ボート利用料、卒業パーティーの参加費などが含まれていました。

コースの主催者側は当初25名程の参加を見越していましたが、ダイビング指導における先駆者の技術を学ぶために参加者たちは北米全域から集結したのです。

このコースには、U.S.Diversの器材セールスマンだったジョン・クローニンとともにPADIを創設したラルフ・エリクソンや、アル・オニールなどの大物も参加していました。彼らは「コースが価値のあるものであって当然である。」というような強い態度でコースに臨み、72名の参加者にもその影響を与えていました。彼らは75ドルの参加費を支払っていましたが、重要なのは、ダイビングを職業とする彼らにとって、自分自身のインストラクターとしての度量が露わになるこのコースに参加することは、大きなリスクにもなり得るものでした。

ラルフ・エリクソン（左）
ジョン・クローニン（右）

デイブ・ウッドワードとユージン・ウィンターは、アメリカ北西部ワシントン出身者で、謙虚さと礼儀正しさがあり、鉛筆は綺麗に手入れされ、メモを取るためのノートは常に開かれ、とても熱心な彼らは常に教室の最前列に誰よりも早く座っていました。



デイブ・ウッドワード

それとは対照的に、カリフォルニア出身の参加者たちは、パーティーにでも来ているかのような気楽さでした。彼らは他のコース参加者によく話しかけ、ダイビングをしている映画俳優や、アシカやケルプの海、彼らの地域の澄んだ海にいる生物などの話をしていました。彼らは自信に満ちていたのです。それというのも彼らは最高レベルのインストラクタートレーニングプログラムをすでにもっていたからです。

ニューオーリンズ出身の参加者たちは、効率的で、ゆったりと構え、口が達者な人たちでした。メキシコ湾でのダイビングについての話を、まるでオイスターバーで真剣な話をするかのように語っていたのです。

ギャリー・ハウランド大尉は、リンカーンの彫刻のような、まるで軍隊の新入隊員募集ポスターに使われるような外見でした。彼は異様な熱意を発しており、このコースにおいて、トップの成績を残しました。そして、後のNAUIインストラクターコースの基準をつくり上げたのです。彼はヒューストンでのこのNAUIコースにおける最高の1人だったと言えるでしょう。

アメリカ海軍の歯科医であったジョー・ボドナーは、常に筆記試験で最高点を記録していたので、軍は彼の記録を参考に民間のインストラクターが達成すべき基準を設定しました。フロリダ出身者も参加していましたが、彼らはビーチにいるような人というよりは、手堅い船乗りというような印象で、シンクホールや淡水ダイビング、洞窟など、様々な経験を有していました。

カナダからの参加者は、とても真面目で品格があり、下着にもアイロンをかけるような几帳面さをもち合わせていました。彼らは国を代表して参加しているという心構えがあり、国全体の人口がヒューストン1都市の人口と同じくらいだとしても、対等な関係を築こうと努力していたのです。

テキサス州からの参加者は、サウスウエストカウンシルクラブの一員で、すでに独自のインストラクタープログラムをもっていました。彼らはユーモアのセンスが豊富な古きよき時代の男たちで、強い南部方言にも誇りをもっていたのです。

サウスウエストカウンシルクラブロゴ

このように様々な背景をもつ人々の集まりだったので、対立や涙、苦悩など、多くの困難が待ち受けており、ダイビングがまさに発達しようとしている時期に、それぞれの参加者がもち合わせた知識と経験をぶつけ合い、統一させていくという強い意志をもっていたのです。参加者同士の対立やコースへの苦情などが聞かれることもありましたが、コースの終盤には互いへの理解が生まれ、そのようなこともなくなり、彼らはアメリカにおける最初の本格的な認定を受けたインストラクターとなったのです。彼らにとっての古い時代の宝物は何かと聞かれたら、必ずこのときのNAUI認定コースと答えるでしょう。参加者全員が合格できたわけではなく、72名のうち53名のみが、完全もしくは条件つきでの合格でした。それでも、彼らはその資格が北アメリカで最高位の資格であることを知っていたのです。

さて、ヒューストンでのコースにおけるハイライトは何だったでしょうか。それを知るには少し時間を遡って、NAUIとそのヒューストンでのコースを生み出した人々に注目しなければなりません。

当初、ニール・ヘスが考案していたのは、1958年に設立され、翌年に実施されたYMCAプログラムから派生させた組織を設立することでした。ニール・ヘスは、アル・ティルマンへのメモで取締役会をニール・ヘス、アル・ティルマン、ジョン・C・ジョーンズ.Jr、ベルニー・エンプレトン、ジム・ヤング、アルバート・ベーンケ.Jr、ジョージ・ボンド、ジャック・ワレン、そしてジム・オウシエールで構成することを提案していました。エンプレトンとヤングはYMCAのリーダーでしたが、ニール・ヘスは彼らの協力がNAUIの成功に不可欠だと考えていました。アル・テ

ィルマン、ニール・ヘス、ジョン・C・ジョーンズ.Jrは、最終的にNAUIは独自の結成が可能と判断し、ジョン・C・ジョーンズ.Jrやアル・ティルマンが地域で考案していたそれぞれのプログラムを、NAUI設立の基礎として使用し、アメリカ水中協会の公認トレーニング機関となりました。ニール・ヘスはNAUI設立以前に協会のトレーニングを請け負った経験があったのです。

■■■――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

アル・ティルマン（NAUI＃1）

晩年のアル・ティルマン

若かりし頃のアル・ティルマン

アル・ティルマンは、常に彼の味方になっていた方が得策と言えるような人物でした。そうでなければ、彼の新しい活動への探究心の大きさに飲み込まれてしまったでしょう。彼の人格を最も客観的に評価したのはギャリー・ハウランドが制作した映画「スポーツダイビング：過去と現在」の中の「アル・ティルマンは力強く、豪快な人物である」という言葉といえるでしょう。アル・ティルマンの活動は様々な分野のスポーツ管理において、常に先進的で、商業レクリエーショナル活動における専門家のための大学講義プログラムを開発したのも彼でした。

アル・ティルマンのダイビングにおける経歴は、スポーツダイビングの歴史における重要な出来事と多く重なっています。彼の初めてのダイビングはカリフォルニア州のレドンドビーチにある桟橋から海へと飛び込んだ10歳のときでした。これが彼を謎に満ちた水中世界へと導いた瞬間だったのです。

アル・ティルマンは1928年1月16日、ロサンゼルスで誕生しました。彼の父は当時全盛期を迎えていたMGMスタジオ（アメリカの巨大マスメディア企業）の警備担当主任でした。高校や大学ではスポーツに熱心に取り組む青年で、スポーツへの関心が高かった彼は、ロサンゼルス郡立公園に就職し、やがてスポーツ部門を任されることになります。この出来事こそが、後に全国初の組織化されたインストラクター養成プログラムを開催することを可能にしたのです。

彼は1953年に、ダイビングインストラクターについてのトレーニングを、スクリップス海洋研究所にいたコニー・リンボーから受けていました。

南カリフォルニア大学で正式な教育課程を修了した後、体育、レジャー、レクリエーションの指導資格得るため、また、ダイビングの指導員としてカリフォルニア州立大学に通いました。

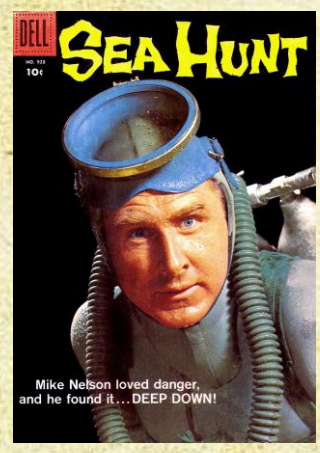
彼はスクーバとレクリエーションに関するいくつかの記述を残しており、それらはどちらの分野においても重要な基礎となったのです。彼はロサンゼルス郡プログラムの基礎となった「アンダーウォーターレクリエーション」の著者であり、スキンダイバーマガジンやダイブマガジンの編集者としても活動しました。

アル・ティルマンはロサンゼルス郡プログラムの設計や設立の経験にもとづき、ニール・ヘス、ジョン・C・ジョーンズ.Jr、スキンダイバーマガジンなどとともにNAUI創設者となり、長年にわたるNAUIへの貢献を行うこととなったのです。

また、アル・ティルマンは1960年～1970年まで、YMCAの全国スクーバ＆スキンダイビング委員会のメンバーを務めました。若年の頃にロサンゼルスのYMCAで働いていた日々から、様々な役割をとおして彼とYMCAとの関係は生涯にわたって続いたのです。

女性のダイビングにおける先駆者であるゼール・パリーとアル・ティルマンは協力して国際水中映画祭を設立しました。彼らの協会は30年以上にわたり活動を続け、現在においてもスクーバアメリカと、北米のダイビング先駆者ほぼ全てへのインタビューを収録したスクーバアメリカ・ダイブヒストリープロジェクトの共著者として名声を得ています。また、アル・ティルマンは民間における最初のダイビングを題材にした映画「スキンダイビング入門」にて、最初の女性インストラクターだったドッティ・フラツィアーと共演しました。アル・ティルマンはZIVテレビ局とイヴァン・トーズのもとで、テレビシリーズ「シーハント」の技術指導としても活動していました。彼はアル・ティルマンへ全ての水中シーンの台本を送り、アル・ティルマンは実際の水中環境にもとづいた訂正案をイヴァン・トーズに送りました。このシリーズのファンであれば、イヴァン・トーズが必ずしもアル・ティルマンの助言に従っていたわけではなく、芸術のために多少の現実を犠牲にしていたことが分かるでしょう。

ゼール・パリー



「シーハント」の宣伝広告

アル・ティルマンとイヴァン・トーズの関係は、カナダの投資家グループの注目を集め、アル・ティルマンに対してバハマのリゾートとダイビング事業の連動の可能性についての調査を依頼しました。この簡単な依頼が、バハマ島の世界初のダイビングリゾート『The Underwater Explorers Society（UNEXSO）』建設の資金を見つけるきっかけとなったのです。

アル・ティルマンが生涯にわたり、NAUI、ロサンゼルス郡、NASDS、YMCAにおいて何千人ものインストラクターやダイバーを認定したことにも触れておかなければなりません。アメリカのスポーツ週刊誌であるスポーツ・イラストレイテッドにおいて、記者のコールズ・フィニツィーは、「ゴリラにダイビングを教えることができる人物がいるとするなら、それはアル・ティルマンだろう」と述べました。アル・ティルマンはその功績から1963年にNOGI賞（ダイビングに功績のあった著名人に贈られる賞）の受賞、1990年にダイビングの殿堂入りを果たしたのです。

NOGI賞トロフィー

1984年、アル・ティルマンはダイビングの指導に費やす時間を年間の4分の1にすることに決め、妻のルツ、息子のトムとともに太平洋岸北西部の別荘に転居しました。彼は余暇を地元の商工会の会長として、また水中活動の法的な技術顧問として過ごしました。

1990年、アル・ティルマンはカリフォルニア州立大学の名誉教授も完全に引退し、ワシントン州の小さなコミュニティカレッジで、数年間体育の指導をするとともに北西部のいくつかのスポーツジムで経営顧問として活動しました。

アル・ティルマンがダイビング業界へ貢献した最大の証は、彼の設立した組織が未だに繁栄し、活動していることです。2004年1月16日の誕生日に脳出血により76歳でこの世を去ったアル・ティルマンですが、晩年は太平洋岸北西部ワシントン州アナコーテスで余暇を過ごし、ダイビングの歴史に関するゼール・パリーとの共同作業を含む、様々な主題についての本を数冊執筆しました。更には地域の珍しい紙と本における展覧会の企画者としての活動や、世界中を旅するなど、ダイビングを活発に行うことはありませんでしたが、釣りや蟹取りなどをとおして、水と親しみました。1994年、66歳のときにはアイルランドで開催されたハンドボール世界選手権にも出場しました。

ロサンゼルス郡のプログラムは、指導技術や基本的な資料、筆記試験などNAUIにとって大きな参考となり、アル・ティルマンはヒューストンでのコースカリキュラムの中心的な作成者でした。1995年にギャリー・ハウランドは「コースや課題を設定し、参加者を1週間にわたり指導、評価したアル・ティルマンはICCプログラムの重要な力だった」と書いています。ハーバードビジネススクールの卒業生であるニール・ヘスは、施設の予約や財政、物資の調達などを担当していました。フロリダ州ブロワード郡の水中指導責任者であったジョン・C・ジョーンズ.Jrのコースは、非常に体系化されていて、ヒューストンでのコースアウトラインの基礎となったので、ヒューストンでのコースの共同作成者と呼べるでしょう。アル・ティルマン、ニール・ヘス、ジョン・C・ジョーンズ.Jrの3名がその時点でのNAUIの最高責任者でした。NAUIの設立にあたり次に重要だったと言えるのは、スキンダイバーマガジンとその2人の経営者、ジム・オウシエールとチャック・ブラケスリーでしょう。

1959年3月にスキンダイバーマガジンは「インストラクターのコーナー」というコラムを作成しました。それがロサンゼルス郡でのダイビングに火をつけ、またニール・ヘスが全国からインストラクター志望者を集めることへの大きな促進力ともなり、全米から大きな反響がありました。ニール・ヘスはアウトラインの提出を要件とし、資格があるインストラクターの名前を公開。その時点でニール・ヘスは、アル・ティルマンのもとで認定を受けたロサンゼルス郡のインストラクターとしての資格と、ボストン・シーロバーズのトレーニング責任者としての立場にいました。

ニール・ヘス

ジム・オウシエール

チャック・ブラケスリー

ボストン・シーロバーズロゴ

ダイビングにおける唯一の重要な雑誌において名前が掲載され、またそこで称賛されていたことから、ニール・ヘスは北アメリカのインストラクターを紹介するコラムの執筆を担当できたのです。NAUI誕生にこれほど適した時期はありませんでした。スキンダイバーマガジンも、息こらえ潜水の領域を飛び出そうとしていたのです。

メーカーの広告はほぼスクーバ器材のもので、ダイビングクラブの影響力も大きくなり、競合他社はスクーバマガジンを出版しようとしていました。スキンダイバーマガジンはNAUI誕生と成長の大きな原動力であり、スキンダイバーマガジンの支援は誕生間もないNAUIが即座に信頼を得ることに貢献し、NAUIがアメリカでのインストラクター協会としてのリーダーであることを業界に広く認知させました。

チャック・ブラケスリーは1995年にスキンダイバーマガジンがなぜ、NAUIと協力したのかを尋ねられたとき、彼は「スクーバダイビングのトレーニングに本当に重要なものを見たからです。NAUIとの協力は、必ずしも多くの利益を生み出すことにはならないと知っていましたが、読者の安全に対する責任が私たちにはあると考えました。アル・ティルマンはロサンゼルス郡のプログラムで実績がありましたし、彼の理念にも共感しました。」と語っています。

NAUI創設者として、アル・ティルマンとニール・ヘスは広く認知されています。1980年の映画「スポーツダイビング：過去と現在」でのインタビューで、NAUIの最初の理事会のメンバーの1人であるギャリー・ハウランドは「アル・ティルマンの底なしのエネルギーとニール・ヘスの先見の明が、私たちが知るNAUIの指導を確立しました。」と語っています。

ジョン・C・ジョーンズ.Jrはブロワード郡水上評議会のダイビング委員会での指導において、献身的な活動を行っていました。彼の作成する資料は簡潔かつ明確で、とても分かりやすいものでした。ブロワード郡のコースは、ジュニアコース、ベーシックダイビングコース、アドバンスダイビングコース、ダイビングインストラクターコースの4つのレベルで構成されており、これらのコースを全て修了するのに必要とされた時間は64時間でした。インストラクター認定コースは、よく計画されたコースで、後に業界での標準となる基本的な要件が全て含まれていました。

□ NAUIという組織名について

駆け出しの組織名について多くの案が、ニール・ヘス、アル・ティルマン、ジム・オウシエール、ジョン・C・ジョーンズ.Jrの間で取り交わされました。ニール・ヘスの当初の案は、ナショナルダイビングパトロールを組織の名前とすることでしたが、ボストンにある同じ名前の組織の会長だったウォルター・ファインバー

グは、ニール・ヘスがこの名前を使用することに反対したのです。その後、ニール・ヘスは「National Association of Sport Diving Instructors」という名前を提案しましたが、アル・ティルマンはロサンゼルス郡のプログラムを作成するときに使用した「Underwater Instructors」という用語を組織名に入れることを提案しました。

1960年6月28日、ニール・ヘスがその案に同意し組織名が決定し、『National Association of Underwater Instructors』、略してNAUIの誕生です。それはMAUIというポリネシア神話の神・英雄や、ハワイ諸島の島の名称に似ており、緑豊かで常夏のダイビングポイントを思わせる、この業界に最適な名称でした。

ジム・オウシエールとチャック・ブラケスリーはダイビングについての共通の考えをもっていました。スキンダイバーマガジンは自社の情報収集のため、新聞記事からのダイビングに関する記事を全て収集するサービスに加入しており、1959年当時、記事のほとんどはスクーバダイビングで親子が犠牲になったというような内容だったのです。スキンダイバーマガジンはスクーバがダイビングにおける主流になりつつあることを目のあたりにし、管理されていない状況では従来以上のリスクが伴うため、彼らはNAUIのような組織がこのスポーツを守らなければならないということを認識していました。

彼らは地域のプログラムを認知し、支援しており、その中の筆頭がロサンゼルス郡のプログラムでした。しかし、高まる人気を受けて、安全に対するより大きな力が求められる時期に差し掛かっていたのです。彼らがNAUIを支持した理由について尋ねられたとき、彼らは「なぜなら私たちはNAUIが強く、安定した人々で構成され、勇気と先見の明をもち合わせており、これらに変わる存在はないと感じたから」と答えています。

彼らは「1時間でのダイビング習得」というようなやり方ではダイビングの未来はないと感じていたのです。

□ 歴史的コースについて

ヒューストンでは、リーダーを含む4人の1組のチームが組まれました。これは参加者のリーダーシップを自然に引き出すロサンゼルス郡のプログラムから引き継いだシステムであり、少人数のスタッフの役割を増強し、スタッフと参加者間の意思疎通の橋渡し役も担っていたのです。

NATIONAL ASSOCIATION OF UNDERWATER INSTRUCTORS

P.O. BOX 111, LYNWOOD, CALIFORNIA — c/o SKIN DIVER MAGAZINE

JAMES F. CAHILL　JIM AUXIER　NEAL HESS　GERRALD H. HOWLAND　JOHN C. JONES, JR.　AL TILLMAN

BOARD OF DIRECTORS

MR. JAMES F. CAHILL

Mr. Cahill is a former Lieutenant in the Naval Underwater Demolition Team 2 (Navy Frogman), Chairman of the Governors Committee to study Scuba and Skin Diving in Massachusetts, Member of the Massachusetts Marine Fisheries Advisory Commission and Senior Diver at the Texas Tower disaster recovery operation.

MR. JIM AUXIER
Editor, "Skin Diver Magazine"

Jim Auxier has been closely associated with divers and diving activities since 1944. Skin diving became a full time job for Jim in 1951 when he and partner Chuck Blakeslee founded Skin Diver Magazine.

MR. AL TILLMAN

Mr. Tillman is former Director, Underwater Activities, Los Angeles County Department of Parks and Recreation. Associate Professor Public Recreation at Los Angeles State College.

MR. JOHN C. JONES, JR.

Mr. Jones is Director, Underwater Training, Broward County, Florida, Red Cross. Mr. Jones pioneered the training of scuba instructors in Florida.

MR. NEAL HESS

Mr. Hess is instruction editor, "Skin Diver Magazine," and Director of Instructor Certification, Underwater Society of America.

CAPT. GERRALD H. HOWLAND

Capt. Howland, USAF, is an Air Force Instructor Training Officer at Randolph AFB, Texas. He was the leading student at the NAUI 1960 Houston course.

CO-SPONSORED BY
THE UNDERWATER SOCIETY OF AMERICA and SKIN DIVER MAGAZINE

The National Association of Underwater Instructors is a nonprofit organization whose purpose is to promote high standards of instruction, through sanctioned instructors, for non-military divers who use self-contained underwater breathing apparatus (SCUBA) and skin diving equipment. Through its objectives, NAUI ultimately hopes to open to all qualified people the science, wonders, and adventures of the underwater world.

NAUI is incorporated in the State of California and files State and Federal income tax forms and offers training and certification for instructor aspirants in North America. The governing body of NAUI, the Board of Directors, consists of a maximum of seven. These Board of Directors appoint the President, Vice President and Executive Secretary, as the executive officers of NAUI.

The Board of Directors meet once each year to determine NAUI policies and fiscal estimates. They also authorize the certification of all successful NAUI graduates. This Board certifies the training and teaching competency of NAUI instructors.

Current NAUI President is Mr. Tillman; Vice President is Mr. Jones, and Mr. Hess is Executive Secretary.

Certification as an instructor requires attending the NAUI 60-hour course in skin diving and scuba teaching, passing tests designed to demonstrate the applicant's qualifications for classroom and pool instruction and to assure that instructors possess technical knowledge of basic principals. A file will be maintained for each certified instructor at NAUI Headquarters, Lynwood, California.

The Board of Directors will select and provide instructor trainers for each official course. Courses will be offered at various locations in North America to meet the demands. Mr. Eugene Winter, Head, Dept. of Physical Education in Walla Walla College, will serve as instructor trainer for Washington, Oregon, Idaho and British Columbia. Mr. Frank Scalli, Maldon, Massachusetts for New England, Mr. Edward Ezekiel, Redwood City, California, for Northern California and Nevada, and Mr. John C. Jones, Jr., Ft. Lauderdale, Florida.

NAUI reaches its objectives by holding 60-hour instructor training, testing, and certification courses, and the production of diving literature, films, etc.

NAUI also compiles statistics on diving accidents so that hazards may be spotted before they become major causes of concern. Further, NAUI, through Dr. Andreas B. Rechnitzer, provides counselling to people who wish to make water sciences their lifetime work.

NAUI is financed by income from the training, testing and certification courses, sale of diving literature and generous grants from manufacturers of diving equipment.

CAPTAIN A. R. BEHNKE, JR.　COMMANDER GEORGE F. BOND　CAPTAIN J. Y. COUSTEAU　DR. ANDREAS B. RECHNITZER

BOARD OF ADVISORS

COMMANDER GEORGE F. BOND — Medical Corps, U. S. Navy

Commander Bond was Squadron Medical Officer, Submarine Base, Pearl Harbor 1951-1956 and Assistant Officer in Charge U.S. Naval Medical Research Laboratory, U.S. Naval Submarine Base, New London, Connecticut until last year when he was promoted to Officer in Charge of the same installation.

Commander Bond is a member of the American Medical Association and was Regional Consultant to the President's Commission on the Nation's Health for six years. Commander Bond is a Qualified Submarine Medical Officer and a Qualified Deep Sea and Scuba Diver, U.S.N.

CAPTAIN A. R. BEHNKE, JR., U.S.N. (ret.)

Captain Behnke entered the Harvard School of Public Health as a research fellow working with problems dealing with exposure to high pressure. Dr. Behnke was Instructor U.S. Naval Medical School 1937 to 1942. In 1939, he participated in the five months of rescue and salvage operation incident to the U.S.S. Squalus disaster. During World War II he carried on intensive investigations in the applied physiology of respiration under high altitude, surface and deep sea conditions, and has been connected with the investigation work at the Naval Medical Research Institute since its foundation.

DR. ANDREAS B. RECHNITZER

Dr. Rechnitzer is the Scientist in Charge of Project NEKTON, using the most unique submersible, the bathyscaph, "Trieste." He is a biological oceanographer with his Ph.D. from UCLA. He received the Distinguished Civilian Service Award from President Eisenhower, February, 1960 and is a life member of the National Geographic Society.

CAPTAIN J. Y. COUSTEAU

Capt. Cousteau is first known as the co-inventor of the world famous "Aqua-Lung". The "Calypso" under his direction has sailed over the world doing general oceanographic investigation, making movies, doing research work and preparing material for the National Geographic Society and scientific groups. He is president of the World Underwater Federation and is author of the popular book "The Silent World".

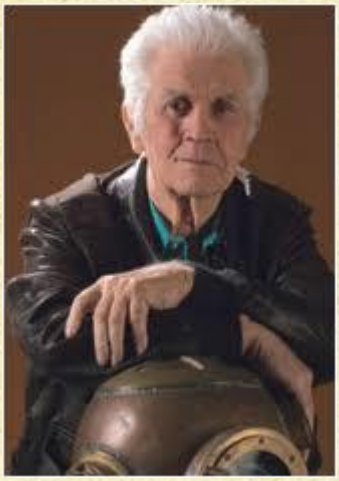
初期のNAUIインストラクターとNAUI理事

最初のNAUI ICC 合格者

■■■――

ラルフ・エリクソン

チームリーダーの1人、ラルフ・エリクソンは体格に恵まれたスウェーデン系の男でした。彼が参加者に近づくと、まるで襲いかかっているようにも見えましたが、実際は明るく、素晴らしい真面目な性格の持ち主でした。しかし、彼はコース2日目に昼食の席で、ニール・ヘスに対し、コースに必要な要件を全て満たすには時間が足りないと不満を漏らしたのです。彼はシカゴダイバーズを代表しており、勇気があり、柔和な性格をもち合わせていましたが、革新派でもありました。



ラルフ・エリクソン

――■■■

このコースはラルフ・エリクソンの思想には合っていない部分もあったのでしょう。アル・ティルマンはコースの正当性を確信し、コースにおける例外や反論について受け入れることはありませんでした。アル・ティルマンはニール・ヘスとラルフ・エリクソンの間に入り、「その話は不適切で、場違いである」と断じたのです。この出会いには一種の緊張感が漂っていて、周囲のコース参加者はこの状況について固唾を飲んで見守っていました。この出来事はアル・ティルマンとってどのような反論があるかの確認のようなものだったかもしれませんが、コースの運営者にとっては、参加者による例外や反論を認めないという意思を広く示すことができる機会となったのです。

スタッフを含めコースに参加していた全ての人が時間に追われ、睡眠時間もほとんどなく、参加者は割り当てられた課題、特に口頭でのプレゼンテーションを準備するのは非常に大変な作業でした。たとえ時間を見つけられたとしても、皆、眠れませんでした。ダイビングの先駆者や全米の最高のダイバーたちと、本気で1つのことに取り組む時間は、あまりにも刺激的で、価値のある瞬間だったのです。

準備不足でコースに参加した人たちにとっては、大慌ての連続だったでしょう。彼らは知識と経験のある者を探しては情報を引き出していました。レイ・トゥッセイはその格好の的です。彼は、元UDT（アメリカ海軍水中破壊工作部隊コロナドトレーニングセンター）出身、ハンサムで高身長、身体能力が高く、弱者に手を差し伸べることができる模範のような人物です。

カナダ人のハーバート・イングラムは、トイレに座ってノートを復習していましたし、他の参加者の多くも同じでした。歯を磨きながら最後の復習を行うことが日常になっていました。その結果が実り、ハーバート・イングラムはNAUI＃37となりました。

参加者だけではなく、スタッフもこの挑戦に対して完全な自信をもっていたわけではありませんでした。この挑戦は全ての人にとって、新しいものだったのです。アル・ティルマンは、自身がつくり出したロサンゼルス郡のプログラムを拠りどころとしてはいましたが、彼は紙に書かれた内容を説明する以上のことをしなければいけないことを知っていました。参加者からは「知識はあるかもしれないが、彼は水中で何ができるんだ」と思われていたに違いないでしょう。

アル・ティルマンは、当時インナーチューブ式だったダイバージャケットでの蘇生法にマウス・トゥ・マウスを選択しました。彼は、ダイバーが事故者をボートまたは岸へと曳航する際に人工呼吸を行う新しい方法を考案し、ロサンゼルススポーツマンショーにおいて、レスキューコンテストのメインイベントとして紹介されたのです。地元大学の水泳チームから2人の女性が（事故者役として）参加し、ダイビングインストラクターは熱狂的なドラムの音、スポットライト、アナウンサーの実況の中、レスキューの技術を披露しました。10日間の中で、1日2回ずつ実施されたこのショーは、インストラクターの指導のためのスキルを充実させたのです。

ある日アル・ティルマンは、テキサスの汗ばむ暑さの中プールにいました。怠けていたわけではなく、彼はヒューストンに来る前に、このチューブレスキューを何度も練習していたのです。うまくいかないと考えられる箇所は、リハーサルで何度も復習しました。彼は大学教授として、自分が教える技術は常に万全の準備で、参加者の技術の遥か先に位置していなければ、参加者が言うことを聞かないことを知っていたのです。未来のNAUIインストラクターたちは、これを見たことがありませんでしたし、その目新しさを気に入りました。彼らは、全く新しい技術を身につけることに成功しましたし、これは、学習者がすぐに成功を収めることができた事例でもありました。アル・ティルマンは、経験から自身の選択が正しかったこと、参加者への指導を順調に行えているということを理解していたのです。

アンドレアス・レクニツィアーは、NAUIの公式な科学者、海洋学者であり、才能のあるゲスト講師でもありました。彼は、1950年代のロサンゼルス郡プログラムでも同じ役割を果たしており、海洋学、水域の状況、海底地質、水生生物などについての知識は、ダイバートレーニングの基礎となったのです。当時、アンドレアス・レクニツィアーほどこれらの学問に精通している人はおらず、無駄のない立ち振る舞いで、あらゆる状況に身を投じる準備ができており、経験から学習を積み重

ねていくタイプの科学者でした。彼はいつもダイビングをしていて、目新しいサンゴを見つけては、彼の拠点であるスクリップス海洋研究所にもち帰っていたのです。

■■■――

アンドレアス・レクニツィアー（NAUI＃57）

アンドレアス・レクニツィアー

アンドレアス・レクニツィアーは、コンラッド・リンボウの親しい友人であり、同僚でした。この2人は、ダイビングにおけるいくつかの伝統をつくり出した人物でもあります。「器材の脱着」、「バディシステム」など、現在のダイビングトレーニングにおいて世界中で指導されているこれらのテクニックは、この2人の科学者の考案によるものです。

議論を呼ぶこともある「心理的準備」のために参加者への嫌がらせともいえる負荷をかけることも、この2人による考案でした。

アンドレアス・レクニツィアーがダイビングにもたらした貢献は特筆すべきものです。彼は水深18,500フィート（5638.8m）の世界に到達した初めてのアメリカ人であり、マリアナ海溝への38,800フィート（11826.24m）の探索を指揮した功績を認められ、アメリカ海軍民間部門優秀勲章を当時のアイゼンハワー大統領より授与されたのです。

彼はまた、優れた科学探検家でもあり、彼の冒険の中には、U.S.Sモニター（アメリカ海軍の軍艦）の沈船探索も含まれていました。そして、CEDAM（非営利の海洋環境調査機関）の設立メンバーでもあり、数年間その会長を務めたのです。

彼はNAUIメンバーとして献身的に活動し、顧問委員会のメンバーとしての在籍期間は誰よりも長く、彼の功績は数えきれないほどありました。NOGI賞も生涯で2回受賞しています。

――■■■

■■■――

ジョン・C・ジョーンズ.Jr（NAUI＃2）

ジョン・C・ジョーンズ.Jrは、テネシー州南部の出身で、賢く、物事を効率的にすすめる性格で、分かりやすく書面で表現することができ、ヒューストンで開催されたコースのコースアウトライン作成に貢献しましたが、それは、彼の数あるNAUIへの貢献の内の1つにすぎません。彼の話し方はとても穏やかで、ヒューストンで

開催されたコースでは、父親のように慕われる存在になりたいとは思っていませんでしたが、チーム間の対立の仲裁に入るのは彼が適任でした。彼がカリフォルニア出身ではなく、遠く離れた生粋の南部出身であったことも重要なことだったのでしょう。

――■■■

ベイルアウトは最後の課題でした。その究極に値する挑戦は何人かの参加者にとっては、それまで見たことがない新しいものだったのです。この技術は水中でいかに器材を快適に操作できるかを試すものでした。シャムロックのプールでは誰もが簡単にこの技能を披露できるようになっていたので、ベイルアウトの課題は海洋で行うことになったのです。

当然、パニックを起こす参加者も多く、経験のあるインストラクターは、参加者に説明し、勇気づけ、指導し、コースで使用されたどんな資料よりも、ベイルアウトに関しては質問が飛び交っていました。「それは水中で実際に使うスキルではないし、そんなことをする人がいるとしたら馬鹿げたことだ。」様々な不平不満もありましたが、スタッフは何度も辛抱強く参加者を励まし続けたので、不平不満をぶつけていた参加者が、テストに合格した後には感慨深いものがありました。

■■■――

ジョージ・ボンド

ジョージ・ボンドは、大柄なアメリカ海軍の指揮官です。荒々しい巨漢は、潜水艦の脱出技術を開発する前は田舎町の医師でした。

コースの参加者は、彼の深く明瞭な話の数々に感心しており、自分の身体を犠牲にしてでも経験を積むことを拒まないアメリカンヒーローのような存在でした。彼ほどNAUIの看板と呼ぶのにふさわしい人物はいなかったでしょう。彼は他の誰よりも、おそらくジャック・イヴ・クストーよりも、NAUI設立に欠かせなかった人かもしれません。

ジョージ・ボンド

――■■■

■■■――

アルバート・ベーンケ.Jr

アルバート・ベーンケ.Jr

アルバート・ベーンケ.Jrは、1960年代のダイビングにおける伝説のような存在でした。彼は親切で、強く、柔和な性格で、ダイビング医学の父とも言えるでしょう。

彼は1937年のU.S.S.スコールスの救助の医学的側面における監督を行い、それがアメリカ海軍の水中での戦闘や生存に関する知識を発達させるきっかけとなったのです。彼は、メリーランド州ベテスダに海軍医学研究所を設立したチームの主要なメンバーでもあり、ジョージ・ボンドと親しく、彼らはダイビングの世界では有名でした。これらのアメリカ海軍の活動が、アメリカの主要なアウトドアスポーツの1つとなる民間によるレクリエーショナルダイビングの生みの親だったのです。彼らの存在はヒューストンのコースに信頼と権威を与えました。医学的側面は常に高度な学問を必要とし、未知な部分も多くあったので、ダイビングには、それらに精通した信頼できるインストラクターが必要でした。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――■■■

■■■――

ハル・ラッチモア

ハル・ラッチモアは、インストラクター候補生にダイビングの法的責任についての講義を行ったテキサス州の弁護士です。それは参加費に見合う価値のあるコースでした。彼は自信に満ちていて、講演者として最適な人物だったのです。

現在でも、ヒューストンでのコースの卒業生は彼が担当した訴訟内容を覚えているでしょう。指導における法的側面は、NAUIのコースにおいてこの後の数年間も補うことができなかった分野の1つであり、1960年のヒューストンでのコースでも補うことができませんでした。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――■■■

■■■――――――――――――――――――――――――――――――――――
ドニー・ウィークス（NAUI＃17）
　ヒューストンでのコースの全てがよい思い出というわけではありません。テキサス州で1990年代もNAUIインストラクターとして活動していたドニー・ウィークスは、1990年代の一般的なダイバーは、1960年の候補者たちよりも上手だと考えています。「多くの参加者が準備不足で、ダイビングの経験もそれほど多くなく、知識も乏しかった。」小児麻痺の症状があった彼は、世界初のハンディキャップダイバーです。並外れた努力によってNAUI＃17となった卒業生として、彼には他の参加者が準備不足だったと言えるだけの経験があるといえるでしょう。
――――――――――――――――――――――――――――――――――■■■

　緊急事態における判断力と機敏性を確認するために、講習中に参加者に過度な負荷をかけることについては、ダイビングの指導において最も議論されている内容の1つです。一部のインストラクターが、参加者のマスクを剥ぎ取ったり、タンクバルブを閉めたりしていたのは、参加者にコースへの心の準備をさせるためでした。他にも参加者同士でウエイトベルトを引っ張り合うなどの「悪ふざけ」を推奨するインストラクターもいて、このような内容を正式なコース内容とすることに反対する参加者も多くいました。しかし、それらの負荷を経験した参加者は、後にダイビング中の予期せぬ出来事でも冷静な対処が可能となり、受講したコースに感謝をするようになったのです。
　ヒューストンでのコースでは、この問題については意見が分かれていました。最終的にNAUIはこのようなトレーニングをヒューストンでのコースに組み込まないことにしたのです。嫌がらせをされる側よりもする側の方が楽しめるというトレーニングに、大きな価値を見出せなかったのです。

□　ヒューストンでのコースにおけるアル・ティルマン
　「私たちは1960年までのロサンゼルス郡におけるプログラムに非常に満足しており、新しい挑戦を探していました。私とジム・オウシエールやチャック・ブラケスリー、スキンダイバーマガジンとのかかわりは、全国的なトレーニングプログラムを作成する大きな助けとなったのです。ニール・ヘスが事業の細部を担当し、ジョン・C・ジョーンズ.Jrも連れてきてくれ、ニール・ヘスがニューイングランド、フロリダ、南カリフォルニアなどのダイビングの重要な地域に代表を配置した功績も称えるべきだと思います。

ロサンゼルス郡のプログラムを指揮してきた私にとっては、コース自体はそれほど目新しくは感じませんでしたが、そこへ参加している業界の有名なスタッフ、様々な地域からの参加者、そしてダイビングにおける教育の未来について真剣に取り組んでいる皆の姿勢に感銘を受けました。ただ1点、公共的なサービス運営のバックグラウンドをもつ私にとっては、指導の中に潜む商業的な利益の影が気がかりだったのです。」

□　ヒューストンでのコースにおけるビル・ハイ

「私はアメリカ水中協会の保全責任者で、ヒューストンでのコースに参加したのですが、3日間参加した途中で、政府からの急な依頼によりコースを去らなければなりませんでした。新鮮さと刺激的なそのコースは、ダイビングの新しい時代の幕開けを感じさせました。」

□　ヒューストンでのコースにおけるギャリー・ハウランド

「約70名の参加者たちが、土曜日からはじまる1週間のコースに参加するために集いました。私は火曜の夜にヒューストンに到着しましたが、ほとんどの参加者は金曜日に到着したのです。彼らには部屋とコースの割り当てがチームごとに行われ、私たちはそれぞれの書物を参加者の学習用に持ち込むことを依頼されていました。

プールでは様々な活動があり、コースの参加者は、個人のダイバーとして、ダイビング講習の参加者として、インストラクターとして活動したのです。ダイビングトレーニングにおけるハイライトは、深いプールへのベイルアウトでした。ベイルアウトでは全ての器材を腕にもって飛び込みます。ウエイトベルトを使う人はそれももって飛び込みますが、当時ウエイトベルトはほとんど使われていませんでしたので、ウエイトなしでベイルアウトを行いました。ベイルアウトから器材を回収して水面に戻った後には、15分間の立ち泳ぎが待っていたので、ウエイトを着けて飛び込んだ参加者には大きな負荷となりました。彼らの中には、もがき苦しんで、器材を落としてしまう人もいたのです。ウエイトなしで実施した私に対して、ウエイトつきでもう1度実施しろと言う人もいましたが、私は簡単にやってのけました。

私はヒューストンでのコースに参加する前に、アメリカ海軍水中水泳学校を優等生として卒業しており、ミシシッピ州のスキン・スクーバダイビング協議会のトレーニングディレクターとしても活動していたのです。ミシシッピ州では5つのダイビングクラブの設立と運営を指導しており、空軍におけるスクーバ器材の説明書を書いたこともありましたし、ボストン・シーロバーズのウォルター・ファインバーグ

と共にインストラクターマニュアルの作成も行いました。これらの経験のおかげで、ヒューストンの1週間は私にとって、とても楽しいものとなったのです。

コースでの講義は素晴らしいものでした。ジョージ・ボンドはダイビング医学を、アルバート・ベーンケ.Jrはダイブテーブルを、そしてアンドレアス・レクニツィアーはダイビングについて知っていること全てを指導してくれたのです。講習中に海軍の6フィートのアンカーを見つけたのですが、その際にリフトバッグを使った回収方法を実演してくれました。水底で彼は私が使用していたヨークタイプのダイビングベストを脱ぐように指示し、それをアンカーに取りつけ、空気を満たしアンカーを水面へと浮上させたのです。私たちは彼と彼の研究の手伝いのために同伴していた人たちと共に、アンカーをボートまで運び、ビーチに戻ると、彼はそのアンカーを自身のビートル（フォルクスワーゲンの車種）のバンパーに取りつけ帰路についたのです。

コースの打ち上げで、私は約2リットルのウイスキーをテーブルの真ん中に置いたのですが、ジョージ・ボンドはこのテーブルに座っており、部屋に戻るときにウイスキーをもっていってしまいました。そしてその後決してボトルを手放さなかったのです。

それは、ときに日付を越えるような長い1日の連続の1週間で、そこにいた全員が成功のために努力していました。共通の目的、チームワーク、そして優れたリーダーシップがコースとNAUIの形成を成功に導き、NAUIは、健全なメンバー同士互いに協力し合うという考えのもとに誕生したのです。ボストン、ニューヘブン、ロサンゼルス、ビロクシなどからの様々なよい教育者が協力し合い、アメリカにおけるダイビングを形成し、その後も世界中からのアドバイスを受けることで、成熟した組織となったのです。

私にとってのこのコースでのハイライトは、生涯にわたる友情を見つけられたことと、NAUIの理事会役員に選ばれたことでした。NAUI設立時の理事会メンバーは、ジョー・ボドナー（NAUI＃9）、ニール・ヘス（NAUI＃3）、ジョン・C・ジョーンズ.Jr（NAUI＃2）、アル・ティルマン（NAUI＃1）、そして私でした。」

□　ヒューストンでのコースにおけるジョン・C・ジョーンズ.Jr
（1970年代前半のインタビューより）

「私たちのブロワード郡でのプログラムは、1950年代のロサンゼルス郡のプログラムと同時期に行われており、アル・ティルマンと私は多くのやりとりを行っていました。ヒューストンで彼と共に活動し、私たちのコースを融合させて新しいNAU

Iのコンセプトをつくることができたことを非常に光栄に思います。私たちは多くの議論を行いましたが、いつもよい友人同士でした。」

ヒューストンでのコースでは、インストラクター資格要件として、懸垂、腕立て伏せ、1マイル走などを含む、YMCAの体力テストが採用されました。ロサンゼルス郡では1度もそれを行いませんでしたが、水泳とウォーターマンシップのテストを行っていたのです。ヒューストンのコースでの体力テストはダイビングとは無関係であるという不満が多く挙がり、議論を巻き起こした課題でしたが、これらの課題を達成した参加者は頼もしいインストラクターとなったのです。

○○○――

ジェリー・ジンゼレタ（NAUI＃5）ヒューストンのコースを振り返った手紙より

「私にとって最高の満足は、最初の全国規模のスキン・スクーバダイビングの指導に専念するNAUIと、その設立にかかわった最高のメンバーと共に活動ができたことです。それは、組織建設の技術と知識を持ち合わせ、NAUI誕生を実現させた、アル・ティルマンと、ニール・ヘスです。」後に淡水ダイビングにおけるNAUIの基準となった指導概要は、ジンゼレタによって作成され、海水でのダイビングについては、ボストン・シーロバーズのフランク・スカリーによって作成されたのです。

――○○○

ヒューストンでのコース翌年、シカゴ、トロント、フォートローダーデールでのコースが開催されるまで、NAUIは目立った活動をしていませんでした。ニール・ヘスは反対する人々に対抗するため、メーカーの支持を募り、NAUIをアメリカの教育機関として確立しようとしていたのです。

北東部出身のフレッド・カルホウンはアメリカ水中協会において一種の波乱を起こしていました。彼の指導概要は包括的で効率的でしたが、おそらく当時は急進的だったのでしょう。協会は全国のダイビングを統一する力のある組織を生み出すよりも、地元の選挙区の利益追及に熱心な地域の政治家タイプが運営するダイビング評議会に力を注いでおり、地域の指導プログラムの地位が高まるおそれのある動きは、協会によって妨げられていたのです。

おそらくこうした教訓から、NAUIという組織が政治的な意図を避けて発展することができたのでしょう。初期のNAUIにおいて全く解決できなかった問題の1つに、NAUIの認定を究極の高水準とするか、または全ての指導に合う最低基準を作成するかということがありました。YMCAやロサンゼルス郡の地方のプログラムは、場

合によっては指導の質と量において、NAUIの基準を超えることもあったのです。NAUIの創設者たちは、高いレベルの地方のプログラムを排除するつもりはなく、プログラムが最高のパフォーマンスになるように奨励していました。

NAUIは指導者としての自我であり、少ない管理の中においても、常に自身を高めていく誇りが、そのインストラクター資格を最高のものにしています。また、組織が大きくなることは「最良」を意味するかという議論は常に存在していて、現在のNAUIにも影響を与えています。

□　ヒューストンにおけるコース開催後の出来事

ヒューストンでのコースの翌年、NAUIは組織としての性質に関して、避けることができない対立に直面していたのです。アル・ティルマンとジョン・C・ジョーンズ.Jrの2人は、ロサンゼルス郡立公園や赤十字といった公共組織の出身から、ダイビングにおける指導もまた、公共的であり非営利の方針を維持するべきだと考えていました。NAUI設立にあたってカリフォルニア州に提出された法人設立に関する届出（アル・ティルマンとニール・ヘスがそれぞれ代表および秘書として署名）には、NAUIの方針と組織の使命が明記されていました。一方、ハーバードビジネススクールを卒業したニール・ヘスは、NAUIを新興ビジネスと考え、器材メーカーからの支援を求めていたのです。ヒューストンでのコース開催後、初めての取締役会はアル・ティルマン、ニール・ヘス、ジョン・C・ジョーンズ.Jr、ジム・オウシエール、ジェームズ・チャイル、ギャリー・ハウランドで構成されており、NAUIの運営に専門家の意見を反映させ、組織の信頼性を高めるために、別の諮問委員会も設立したのです。最初の諮問委員会は、アルバート・ベーンケ.Jr、ジョージ・ボンド、ジャック・イヴ・クストー、アンドレアス・レクニツィアーで構成されていました。

当初から議論されていたのは、ダイビングにおける指導が道徳的な義務であるのか、または商業的活動の一部とみなされるのかということでした。おそらく全てのスポーツに言えることですが、リスクのある活動は、それを広めようとする人、そこから金銭報酬を得る人に大きな責任を与えることになります。

この問題に間違いや正解はありません。最終的には両方の考え方を融合させる機会が設けられたのですが、1960年代初頭の業界が未熟だった時期においては、そういった問題よりも、組織内外の主導権争いや、それに伴う強力な指導力の登場の方が重視されていたのです。

スキンダイバーマガジンは、時代の潮流に巻き込まれ、メーカー、ダイビングショップ、ダイビングクラブや個人のインストラクターなど、あらゆる側面からの圧

力を受けるようになっていました。ジム・オウシエールとブレクスリーは、読者への責任と広告収入による存続と利益のどちらも真剣に考えなければなりませんでしたが、彼らは諦めなかったのです。そうした利益の追求よりも、1961年においてもNAUIへの支援を強くしていきました。1961年1月に最後のインストラクターコーナーが公開された後、NAUIがその後を引き継いだのです。

ニール・ヘスは、次のNAUIコースをミズーリ州カンザスシティのラルフ・ポプラーに委託しました。ラルフ・ポプラーはカンザスシティで活躍していましたし、1960年のヒューストンでのコースにおいても良好な結果を残していたのです。しかし、ニール・ヘスとラルフ・ポプラーの関係は異なる方向に進み、ラルフ・ポプラーはニール・ヘスのコース運営方法と利益の享受について批判する活動をはじめたのです。ニール・ヘスはラルフ・ポプラーが業務を完了せず、簡単な書面のみでコースを中断したと主張しました。コースでラルフ・ポプラーの主要なアシスタントとなる予定だったギャリー・ハウランドは、ラルフ・ポプラーとは連絡をとることが全くなかったので、何が起きているのかさっぱり分からなかったと証言しています。

1961年の夏にはトロント、シカゴ、フォートローダーデールでのコースを準備しました。トロントでのコースは、アメリカ水中協会の強力な支部であり、カナダにおけるダイビングの父と称されたベン・デービスによって運営されました。彼の参加はNAUIがアメリカ水中協会の公式な指導組織として認識され、またカナダにおけるダイビングの運営の足場を固めるために重要な役割を果たしたのです。

ベン・デービス

トロントでのコースは、カナダで最初のダイビングコースとなり、トロント大学の学生27名が参加しました。このコースでの法的スポンサーはカナダ水中クラブ（NAUIはこの時点ではアメリカ合衆国でのみの法人登録）で、オンタリオ水中協会、エトビコク水中クラブも非公式のスポンサーとして参加したのです。また、ベン・デービスはNAUI＃101となりました（＃1～＃100までは、アメリカ合衆国のインストラクターのために予約されていたナンバーのため）。1995年の記事の中で、ラリー・バーデン（NAUI＃5251）（彼の父（NAUI＃127）はトロントでのコースに参加していた）は、最初のカナダでのコースについて、70歳になったときも現役のNAUIインストラクターであるベン・デービスと対話しています。「ほとんどの参加者は泳ぐのがとてもうまく、私たちは彼らに向かって現在では考えられないよ

うなものを投げつけていました。彼らは、15分間の立ち泳ぎについてウエイトを装着して行い、更にレギュレータなしでタンクから呼吸できることを示さなければなりませんでした。」

トロントのコースにも独自の理事会がありました。理事会のメンバーはブルース・バブコック、ジョージ・バート、ベン・デービス、エド・デイ、ハーバート・イングラム、ケン・リン、ボブ・スミスでした。彼らはカナダの組織のスポンサーを代表していて、NAUIに地元のダイビングコミュニティにおける権限を貸しつけていたのです。このコースの指導者には、エド・ランピア、ニール・ヘス、ジェリー・ジンゼレタ、レイ・トゥッセイ、アル・オネイル、クレッシー・マッカティ、ロジャー・ディーン、デイヴィッド・アンダーソン、ベン・デービスが含まれていました。38名の参加者の中で、22名のみがNAUIインストラクターとして認定され、8名は条件つき合格となったのです。

ラルフ・エリクソンは、ヒューストンコースの卒業生としてシカゴの理事となり、アル・ティルマンやニール・ヘスと共に活動しました。ジョン・C・ジョーンズ.Jrは故郷のフォートローダーデールへと戻り、ダイビング人口の大きなこの地域に、新興のNAUIを持ち込んだのです。

ニール・ヘスは、すでにYMCAやボストン・シーロバーズが長年にわたり活動していたニューイングランドにNAUIを進出させようと考え、おそらく東海岸で最も影響力のあった商人であり、愛らしく好感のもてる人物でもあったジム・ケイヒルの元へ向かいました。ジム・ケイヒルは理事会の役員となることを了承し、同時にベン・デービスも理事会役員となったのです。1961年2月時点での理事会役員はアル・ティルマン、ニール・ヘス、ジョン・C・ジョーンズ.Jr、ギャリー・ハウランド、ジョー・ボドナー、ジム・ケイヒル、ベン・デービスで構成されたのですが、理事会は1962年になるまで開かれませんでした。

■■■

ジム・ケイヒル

ジム・ケイヒルよりも陽気で魅力的な人物は、おそらくいないでしょう。彼は、東海岸のダイビング業界における主要な企業であったニューイングランドダイバーズの看板人物でもありました。第二次世界大戦中には、アメリカ海軍の潜水隊員として活動しており、数多くの素晴らしい話を語り継ぎ、誰もが必要とするようなインストラクターであり、ニューイングランドにおけるNAUIの存在感を大きく高めてくれたのです。彼は、模範となるような人格の持ち主で、1962年～1966年の在職期間中、NAUI理事会メンバーの中でもとても人気がある人物でした。1962年のグロスタースワンスプットコースを最高のスタッフと共に開催したのですが、これはNAUIのコースを披露する絶好の機会であり、初期のNAUIがより広く受け入れられるきっかけともなったのです。

ジム・ケイヒル

■■■

メーカーからは、最終的にいくらかのサポートがありましたが、スタッフにスクーバ器材以外のものが提供されたことを示す記録はありません。ニール・ヘスは、これらを確実に管理していました。

シカゴでのコースは、トロントと同時期に開催され、ニール・ヘスは両地域を行き来し、アル・ティルマンはシカゴにおいて8月6日～12日の間、監督を務めました。コースはグレンビュー海軍航空基地で開催され、30人の参加者のほとんどは、開催施設がその質実剛健なトレーニングにふさわしい場所だと感じました。コースのハイライトの1つは、伝説的な物理教師トーマス・キュアトンによる水中歩行です。彼は水着だけでプールに飛び込み、浮力を調整し、水中をプールの端から端まで歩いて見せ、コースの参加者を驚愕させたのです。この地域は海がなく、淡水であるミシガン湖岸であり、そこではセーシェ（湖に吹く風によって引き起こされる波）や海洋学に対応する陸水学などについての研究が行われる場所でした。

コース開始の8月6日に参加者はグレンビュー海軍の兵舎に到着し、午前8時にニール・ヘスによるスピーチが行われ、コースが正式に開催されました。NAUIで最初の女性参加者ナンシー・ギルを除いて、参加者と教師が同じ宿舎を共有しました。

シカゴでのコースにはトレーナーとして、ニール・ヘス（ダイビングの物理）、アル・ティルマン（指導法）、ウォルター・カーカー（医学）、ハル・ラッチモア（法的側面）、ドナルド・マクノート（海洋生物）、ラルフ・エリクソンとジェリー・ジンゼレタ（プールワーク）、アル・オニール（器材）、そして健康に関する専門家でありダイビング作家のビル・バラダが参加していました。コースは途中3時間の休憩を挟み午前8時から午後9時30分まで続きました。

NAUIにおける最初の女性インストラクター、ナンシー・ギル（NAUI＃92）は、30名中24名の合格者の内の1人となったのです。オープンウォーター試験はシカゴから60マイル北に離れた池で行われ、インストラクターコーナーの時代からニール・ヘスとの交流があったジェリー・ジンゼレタは、コースでの大変過酷な作業を強いられる中よく働いてくれました。

ここでの素敵な物語の1つは、オレゴン州の田舎町から参加していたハル・エドリックについてです。彼はここでインストラクター資格を取得したのですが、それ以上に大切なものを手にしたのです。それは、大都会で生きていくための少しの経験と、このコースでのナンシー・ギルとの出会いでした。その出会いは、2人を結ぶきっかけとなったのです。

■■■――

ハル・エドリック

大都市を訪れたことが1度もないハル・エドリックにとって、シカゴでのNAUIコースへの参加は少し勇気が必要と考えていました。そのため彼はシカゴに数日早く到着し、NAUIコースに参加する前、ミシガン湖で遊泳することにしたのですが、その最中に服をなくしてしまったのです。また、50ドル札を両替しようと思い、バーで飲み物を注文した際に、隣にいた男にお釣りをつかみ取られ逃げられてしまいました。男を見つけようと路地裏を覗き込んだとき、男が誰かを銃撃し、そしてその銃をハル・エドリックに向けたのです。当然の如く彼は走って逃げたのですが、その勢いは田舎のYMCAの事務所まで逃げ帰ってしまいそうな勢いでした。これら災難を経験したことにより、後でのNAUIコースは、彼にとって優しい出来事のように感じたことでしょう。

――■■■

翌週、ニール・ヘスとアル・ティルマンはフォートローダーデールでのコースのため、ギャリー・ハウランド、ジョー・ボドナー、ジョン・C・ジョーンズ.Jrと合流しました。

1961年、コース会場のゴルトオーシャンマイルホテルがあるフォートローダーデールは、シカゴのまばらなダイビングの風景とは対照的に、穏やかな気候と緑豊かな熱帯の楽園といった場所でした。参加者は1泊3.5ドルの4人部屋に宿泊し、女性2人を含めた、39人の参加者が集まりました。

その頃、ニール・ヘスは組織の運営において、アル・ティルマンやジョン・C・ジョーンズ.Jrへの報告や相談をせずに秘密裏に物事を進めるという過ちを犯していたのです。彼らは初期のNAUIにおける首脳であり、ニール・ヘスは彼らがつくり上げたプログラムでNAUIの成長を促進させていました。スキンダイバーマガジンのNAUIページでも、ニール・ヘスは「彼（アル・ティルマン）がアメリカ合衆国の安全なダイビングの要であるということに、全く疑いはありません。」と記しています。アル・ティルマンとジョン・C・ジョーンズ.Jrは、ギャリー・ハウランドやジョー・ボドナーと、様々なことについて話し合いました。ニール・ヘスについての様々な情報を議論するうちに、彼がNAUIを個人的につくり上げようとしていることに対する疑問が生じました。ニール・ヘスは重大な衝突へと足を踏み入れていたのです。彼はメーカーからの協賛器材を4人の理事会メンバーに配布し、彼の陣営に引き込もうとしていたのです。

1961年後半に、ワシントン州シアトルにて、コースが追加開催されることになり、ワシントン評議会スキンダイビングクラブの協力を得て9月10日～16日の日程で開催され、コース修了者は両方の機関から認定を受けました。宿泊はワシントン大学の施設を1泊2.5ドルで利用可能とし、コース参加費はヒューストンでの第1回のコースと同じ75ドルでした。ユージン・ウィンターズはボブ・シーツ、アメリカ海軍のショー博士、ワシントン大学海洋学部のフレミング博士、ビル・ハイらの援助を受けて、主任インストラクタートレーナーとして活動し、アル・ティルマンはNAUI本部の代表として、指導の実践と技術を指導しました。

■■■――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ビル・ハイ（NAUI＃175）

「彼の体内には血ではなく、海水が流れている。」このように彼をたとえる人もいました。沿岸警備隊の息子であるビル・ハイにとって、海は常に身近なものであり、海をとおして友人をつくることを学び、幼年期と思春期を漁師として過ごしたのです。

ビル・ハイ

彼の釣りへの愛情はそれだけにとどまらず、魚の専門家にまでなったのです。ワシントン大学で水産学を学び、そこでの研究のためにスキンダイビングをはじめました。

1955年に2人の学生がビル・ハイにスクーバを紹介したとき、彼は魚の研究のためにあっさりとスクーバを受け入れました。他の教授たちはこの新しい「玩具」に対してあまり興味を示しませんでしたが、ビル・ハイは2人の学生が卒業した後も、スクーバを支持し続けたのです。彼の念願が叶い、スクーバの価値が証明されたのは、漁業局が鮭を上流に誘導するための電線によって、鮭が感電するのを防ぐ調査のために、アクアラングと質素なドライスーツを提供したときでした。

プロジェクトが終了すると、ビル・ハイはスキンダイビングの世界に戻り、スピアフィッシングに熱中しました。彼はダイビングにおける優れた指導者として認められており、1959年に北西部ダイビングクラブ協会の会長に選任されたのです。彼は会長としてアメリカ水中協会の大会に派遣され、その後も1970年まで、全ての大会に代議として参加しました。

彼の科学分野への貢献は伝説となっています。1970年、彼は60日間の水中居住実験「テクタイトⅡ」の上級科学者および乗組員の主任を務めたほか、1971年および1972年のNOAA（National Oceanic and Atmospheric Administration: アメリカ海洋大気庁）での水中居住実験における上級科学者としても参加したのです。

NOAAのロゴ

ビル・ハイは2年間、NOAAによって国立ダイビングコーディネーターとして任命されました。この間、NAUIを北西部の権威として維持し、1975年にグレン・エグストロムの後任として会長に就任したのです。

ビル・ハイは、現在もダイビング業界に影響力があります。彼はPSI Inc.を設立し、スクーバタンクの検査と認証の第1人者として認められており、ダイバーに適切なタンクの検査手順についてのトレーニングを続けています（彼の会社は3,000名以上の資格のある検査員をトレーニングしてきました）。彼はシアトルで長い間生活しており、おそらく彼の体内には海水が流れていることでしょう。その他のダイビングの先駆者が、同様に北西部での活動を行っていたことも、注目に値するでしょう。アル・ティルマン、E.R.クロス、デニス・グレイバーなど、他にも多くの先駆者が、カスケード山脈が走るこの地域で活動していたのです。

ワシントン大学のキャンパスでコースの卒業式が行われ、その中で優秀な学生はリチャード・コッチ（テストにおいて最高得点を記録）、フランク・ベイカー、ビ

ル・ハイでした。 21人の候補者のうち13人だけがNAUIインストラクターの資格を受けたのです。
――■■■

○○○――
ビル・ハイによる1961年ワシントン州シアトルでのコース回想

「私はその時点でインストラクター候補生と、コースディレクターを兼任した唯一の人物であり、主席でコースを修了しました。キャプテン・ダスティ・ロデス（NAUI＃176）もコースに参加しており、彼は今でもタイでNAUIコースを開催しています。アルバート・ベーンケ.Jrもスタッフとして参加し、偉大な水中写真家の1人であるチャック・ピーターセンや、深海探査船（パイシーズ）を設計したマック・トンプソンも参加していました。ベイルアウトはアルカイ岬の9mの水深で行われました。」
――○○○

1961年における一連のコースにおいて、ロサンゼルスで生活していたニール・ヘスとアル・ティルマンが多かれ少なかれ影響力を発揮していました。コース開催の次なる予定地は、独自のインストラクタープログラムを所有していた主要地域、ロサンゼルスとマサチューセッツ州グロスターの2箇所への進出でした。

この時点でNAUIは、アメリカ水中協会との提携を解消していたのです。アル・ティルマンとギャリー・ハウランドはロサンゼルスへ向かう途中、ニューオーリンズに立ち寄り、協会の会議に出席し、NAUIが公式のトレーニング機関としての役割を終えるが、非公式での協力は続けると宣言したことを後に回想しています。

NAUIとアメリカ水中協会には様々な関係があり、アメリカ水中協会の本格的誕生も、1960年のヒューストンにおける初のICC（Instructor Certification Course：インストラクター認定コース）であったことにも注目すべきでしょう。様々な個性や地理的概念によって、協会を1つにまとめるために苦労していたので、NAUIをトレーニング機関として認定しましたが、NAUIはすでに1つのダイビング指導機関として機能していたのです。ギャリー・ハウランドは協会のトレーニングディレクターとして任命され、3年間にわたりミシシッピ州ビロクシで活動したことを回想しています。ビル・ハイは、NAUIが確かに協会の「公式トレーニング機関」となっていたが、本当の意味の繋がりは存在しなかったと回想しています。その他の情報として、当時の協会はNAUIをより組織化された機関として認めており、NAUIにダイ

ビングのトレーニングを委任し、協会としては他の側面に力を入れていきたいと考えていました。両者の関係は長年にわたり誤解されており、1978年のNAUIニュース記事中でも、何人かのNAUIメンバーはNAUIを依然として協会の「公式トレーニング機関」であると思っていたのです。

ニール・ヘスとアル・ティルマンは、本当のNAUIの使命が何であるか、メーカーとの取り引きについて、批判が本当に必要であったか争っていました。議論はNAUIを宣伝し、存続させる力のあったスキンダイバーマガジンのジム・オウシエールを巻き込み、最終的にアル・ティルマンが描くNAUIの使命を支持したのです。

ニール・ヘスは、この時点までNAUIコースの開催について多大な貢献をしていましたが、多くの疑わしい彼の行動や報酬についても明らかになり、1961年10月20日にアル・ティルマンに提出された正式な書面にて、ニール・ヘスは「ビジネス上の圧力」を理由にNAUIでの全ての業務を辞任したのです。スキンダイバーマガジンは本社にNAUIオフィスを設置し、アル・ティルマンをNAUI事務局長兼会長、スキンダイバーマガジンの広報担当局長、国際水中映画祭事務局長として任命しました。ギャリー・ハウランドをスキンダイバーマガジンの事務局長に就任させ、NAUIページを拡張、スキンダイバーマガジンは完全にNAUIをサポートするようになったのです。

1962年1月、NAUIの完全な再編が行われました。年次理事会で、アル・ティルマン、ベン・デービス、ギャリー・ハウランド、ジョン・C・ジョーンズ.Jr、ジム・オウシエール、ジム・ケイヒルの各理事は満場一致でニール・ヘスの辞任を受け入れ、新しい時代がはじまったのです。 新しい役員が選出され、ギャリー・ハウランドが会長に、ジョン・C・ジョーンズ.Jrが副会長に、ジム・オウシエールが書記長になり、そして、アル・ティルマンは事務局長に就任しました。NAUIの実際の業務は、事務局長から新たに再編された理事会へと移されたのです。NAUIの理事会が完全な形で1つの場所に集まったのはこれが初めてでした。

NAUIは、同時に全ての業務をアル・ティルマンの自宅からカリフォルニア州リンウッドのスキンダイバーマガジン本社へと移したのです。この合意はスキンダイバーマガジンがNAUIに事務所の管理、事務サポート、郵送サービスなどを年間1,500ドルで提供するという内容でした。また、NAUIは年間10ドルで加入できる最大100ドルの保証がついた賠償責任保険の提供を開始したのです。

南カリフォルニアでのNAUIコースは、ロサンゼルス郡の領内サンタモニカで開催され、ヒューストン以来2番目に多い51人の参加者を集めました。このコースにはロサンゼルス郡のインストラクターも多くクロスオーバーのために参加していたのです。1974年にNAUI会長に就任することになるラリー・クシュマンもこのコース

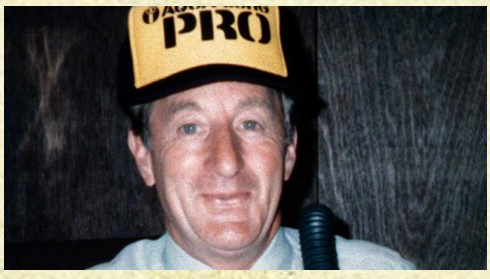
に参加していました。シーアンドシーでのダイビングの先駆者であるデューイ・バーグマンは、後に生涯の友人となり、ハワイでNAUIの主要なリーダーとなったロイ・ダムロンに出会いました。このコースには理事会メンバーの主要なスタッフ（アル・ティルマン、ジョン・C・ジョーンズ.Jr、ジム・ケイヒル、ギャリー・ハウランド）が参加していました。

太平洋南西岸のコースでは、ダイビングにおける心理学がアル・ティルマンの大学時代の同僚であるカリッシュ、法的側面はNAUIの顧問弁護士デビッド・ジェイコブソン、危険な海洋生物はジム・スチュワートによる講義の担当で、開催されました。特に心理学については、これ以前のコースでは見落とされていた部分だったのです。このコースでは51名中31名が合格しました。

こうしてNAUIは南カリフォルニアへの進出に成功し、ロサンゼルス郡のリーダーたちは、NAUIを地理的に広範なエリアをカバーする組織の1つとして受け入れたのです。NAUIはすでに存在していた他のプログラムに取って代わったわけではありませんでしたが、多少の混乱を引き起こしたことは事実でしょう。

東海岸、マサチューセッツ州グロスター・スワンスプコットでのコースは、すでに成熟したインストラクターコースが存在したこの地域へのNAUI進出の足掛かりとなりました。

フランク・スカリー、ポール・チモロス、フランク・シンガー、ウォルト・ヘンドリック、フレッド・カルホウン、リーダーのジム・ケイヒルは後年のダイビング業界にとっての重要人物となる面々で、このコースは彼らの素晴らしい才能と可能性を凝縮したようなものでした。NAUIにとって、南カリフォルニアでのコースは地域の大きな勢力（ロサンゼルス郡）を気にすることなく開催できたコースでしたが、ニューイングランドでのコースは、当時YMCAが覇権を握っていた中での開催でした。しかし、そこでもNAUIは大きく躍進したのです。



フランク・スカリー

設立から2年が経過し、NAUIは6回のインストラクター認定コースを開催していました。指導基準を確立させ、北米におけるインストラクターの模範となり、この時点でNAUIは最も人気が高く、効果的なダイビングの指導における全国規模の組織となっていました。そして今後も長く組織を継続させることになる強い基盤も確立させていったのです。

□　1963年～1966年のNAUI

NAUIは1963年までにスキンダイバーマガジンのオフィスに定着し、共同運営の方針は双方に利益をもたらしました。ジム・オウシエールとチャック・ブラケスリーはダイビング業界の潮流を常に注視し、NAUIへのアドバイスを続け、「NAUIページ」と「NAUIニュース」は、インストラクターコースの参加者を募集する記事を公開し、NAUIの発展を促進したのです。

当時のダイバー認定手順は、インストラクターが講習完了後に参加者の名簿とコースの概要を郵送することでした。認定証（後にCカードと呼ばれるようになる）は郵送で返送されていたのですが、コース修了時点で、インストラクターからカードを受け取ることができないという不満があったため、ほとんどのインストラクターは問題を避けるために前もって参加者の名簿を送っていました。不合格だった参加者にカードを発行しないという基本的な責任はインストラクターにあったのです。しかし、インストラクターから郵送されたコースの概要のほとんどは、ジョン・C・ジョーンズ.Jrが作成した最小限の必要要件をコピーしたものであり、NAUIはダイバー認定者の受講状況を心配しはじめていました。

ダイビングポイントにやってくるダイバーの技能に対しても、心配する声が挙がるようになり、インストラクターの指導の内容を管理する必要が出てきたのです。解決策として、ロサンゼルス郡のプログラムが採用していた参加者にアンケートを送る方法が採用され、各修了者に対し、コース内容についての質問や、受けた指導への感想などが調査されました。

80%以上のアンケートが回収され、ほとんどはインストラクターへの肯定的な意見であり、同じインストラクターへの苦情が報告されない限り、アンケートはNAUIの事務所で単に保管されていただけでした。特定のスキル、学科などのコース内容、特に参加者の安全に関する項目が指導されなかったことを示すアンケートが、特定のインストラクターに対して複数報告された場合、NAUI本部よりインストラクターに対してその内容が通知されます。そういった結果が継続して報告され、改善されない場合、NAUIはインストラクターに対して資格剥奪や停止などの警告を行いました。一部のケースでは、実績のあるインストラクターが現地で他のインストラクターの指導を監督するケースもありました。このようにして、NAUIはその安全への責任を守っていたのです。

1963年1月、ジョン・C・ジョーンズ.Jrとアル・ティルマンは共同でNAUI初となるインストラクターマニュアルを作成しました。ジョン・C・ジョーンズ.Jrが実務を行い、アル・ティルマンはこのプロジェクトの監督を行ったのです。このマニュアルはバインダーのスタイルで作成されており、後に改訂や補足があったときに編

集がしやすいようにデザインされ、パートⅠ：一般手順、パートⅡ：基本コース手順、パートⅢ：インストラクターコースワークブック、パートⅣ：教育的側面、パートⅤ：医学的側面、パートⅥ：参考文献、パートⅦ：メンバーシップ名簿で構成されていました。

NAUIのインストラクタートレーニングマニュアルは、協会の代表するものとして、NAUIインストラクターがコースを実施する際の基準が定められたのです。

指導基準の一部である、倫理的な規定も作成されました。これは、NAUIの一部として存在していた先駆者たちの個性を取り除くような作業に見えましたが、インストラクターに配布された全ての書面には、アル・ティルマンからの覚書が添えられていました。「協会は、一部の分野および特定の教育状況では、上記の基準が実現できないことを十分に認識しています。NAUIは個人個人のインストラクターの活動を支援するために存在し、指導にとって非現実的な障害を作成するためのものではありません。また、私たちは商業組織ではなく専門職の組織です。NAUIの基準は、正当な理由がある場合は変更ができますが、決して基準を下げることはありません。」この単純な覚書は、メンバーそれぞれに決定権があることを語るものであると同時に、常に最高の指導を行うよう要請するものでした。

1963年には、約600名のNAUIインストラクターがダイバーの誕生を支えるようになりました。NAUIインストラクターとなった卒業生にとって、NAUI No.は彼らの誇りとなっていました。事務局長として活動していたアル・ティルマンは、インストラクターからの手紙には常に署名とNAUI No.が記載されていることに気がつきました。NAUI No.は、彼らのNAUIとしての存在を象徴するもので、整備された組織の一員であることを証明していたのです。

この時期はまた、インストラクターを常に最新の状態に保ち、高いレベルの教育スキルを維持することへの関心が高まっていた時期でもありました。インストラクターの再認定のために、新しいプログラムの開発が必要だったのです。ロサンゼルス郡のセミナー、ワークショップ、講習が試みられましたが、これらは地域が限定されたものでした。そのような取り組みの1つが、1964年のカタリナ島でのトレーニングでした。ユージン・ウィンターズはアル・ティルマンと共に、カタリナ島のキャンプフォックスでこのコースを運営し、1970年代に事務局長としてNAUIを率いることになるジョン・ハーディ（NAUI＃1002）がコースの主任でした。そして、後に彼の妻となるパット・ラムは、NAUI本部の秘書として参加したのです。

北米全体でのダイビングの発展には、更に多くのインストラクターが必要でした。マイアミ、フロリダ、北西部、北カリフォルニア、サンディエゴでコースを開催する時期に差し掛かっていたのです。サンディエゴには西海岸におけるダイビングの発展に貢献していた2つの機関がありました。ボトムスクラッチャーズとスクリップス海洋研究所です。

ボトムスクラッチャーズ

NAUIにとって、インストラクター認定コースが業界に影響力を与える強みであったことは間違いありません。NAUI草創期の1960年代前半には、多くの批判もありましたが、彼らは自らに「批判されたことのないインストラクターというのは、活動をしたことがないインストラクターだ。」と言い聞かせながら、自分たちの使命を守り続けたのです。NAUIの組織の中でさえ意見の対立があり、インストラクターは自分たちの使命のために対立していたでしょうから、それは簡単ではありませんでした。しかし、こういった批判や対立は組織が成熟し、成長するのに欠かせなかったのです。

1963年～1965年までの間、メーカーはまだ中立的な存在でした。彼らはダイビングショップのオーナーやその要求に対して、段々と従順になっていきました。ジョン・ガフニーのNASDSはメーカーにとって重要な存在になりつつあり、メーカーはNAUIとの協力を大きくすることで疎外感を感じたくはなかったのでしょう。NAUIは成長に苦難していた草創期の間、安全なダイビングの促進をとおして業界へ貢献をしていたことから、商業的な支援も得ることができたのでしょう。この貢献はまた、ダイビング業界を煩雑な法律から守る役割も果たしていました。

ダイビングショップのオーナーの視点で見ると、NAUIインストラクターの考え方は、商品としての指導というよりも、サービスとしての指導という考えが強いように見えました。

NAUI本部の業務は、インストラクターと認定ダイバーの増加に伴って拡大していきました。急激なダイバーの増加に加えて、若者向けのジュニアプログラム、ケイブやアイスダイビング、水中撮影、レスキューなど、特定の分野のダイビングも登場し、その教育は多様化していったのです。NAUIの核となるインストラクター認定コースについても、多くの改革を求める声が挙がるようになりました。

これらの新しいプログラムは、地域に合わせて試験的に、またプログラム自体の発展のために地域のインストラクターによって提供され、改善を求める声は、様々

なインストラクターから挙がりました。NAUIという組織に、ゆっくりと寛いでいる時間はなかったのです。

これらのNAUIの拡張と発展を妨げる、新しい問題も浮上しました。1963年9月、スキンダイバーマガジンはペダーソン出版社へと売却され、企業精神も刷新されたのです。ジム・オウシエールは編集者として残留し、新しいオーナーはNAUIに新しい事務所を、カリフォルニア州のハリウッド大通りに用意したのです。

ペダーソン出版社の執行役員は、財政的サポートをするうえでのNAUIの活動にあまり興味を示しませんでした。また、特定の指導プログラムをサポートすることは、その他の指導プログラムを採用する機関からの広告収入の減少につながるという意見もあったのかもしれません。ペダーソン出版社による買収の影響は、スキンダイバーマガジンとNAUIの友好的な関係と、成長の共有が終了することを意味していました。NAUIはすでに基盤が固まりつつあり、自力での運営も可能だったので、理事会が慌てることはありませんでしたが、NAUI本部は自宅のような事務所に戻り、各支部の活動がますます重要になったのです。

支部の分担は1964年、メリーランド州アナポリス（そのとき海軍兵学校においてNAUIインストラクターコースが開催されていた）での理事会で決定され、ジョン・C・ジョーンズ.Jrが大西洋支部を、ベン・デービスがカナダ支部を、アル・ティルマンが太平洋支部を管轄することになり、各支部長は600ドルの管理費を受け取りました。ジョン・C・ジョーンズ.Jrが会長に任命され、レイ・トゥッセイは新しく理事会メンバーとなり、秘書兼会計として選出され、アル・ティルマンは事務局長に再選されました。

アル・ティルマンは水中探検家協会UNEXSO（アル・ティルマンの構想したUNEXSOは、バハマ等のフリーポートにある、ダイビングのアメニティを完備した最先端のリゾートでした）についての事業にも携わっており、カナダの投資家グループによって支援を受けたグランドバハマ水中探検家協会は、NAUIの国際本部としての役割も無償で果たしたのです。NAUIは国際的な機関となる準備ができており、アル・ティルマンは理事会の承認を得て、NAUIとBSACとの間でダイバーとインストラクターの相互承認を積極的に認めるための協定に署名するため、イギリスへと足を運びました。

1964年～1965年にかけてUNEXSOが稼働しはじめたとき、この最新鋭のリゾートにチャック・ピーターソン、デイブ・ウッドワード、ジャック・マッケニーの3人の優秀なNAUIインストラクターがスタッフとして採用されたのです。非常にNAUIとのかかわりが強く反映され、アメリカ合衆国とカナダ以外では初となるインスト

ラクターコースが開催され、1965年12月12日にはフリーポートサイトにNAUIの国際本部が公式に開設されたのです。

フリーポートでの最初のNAUIダイバーコースは、ハンク・ハリデイ（NAUI＃504）によって、地元のプールと学校の教室を利用して開催されました。

UNEXSOは完全に稼働しはじめていたわけではありませんでしたが、51名のインストラクターコース参加者の成功（このコースで完全な不合格となった参加者はいませんでした）によって、フリーポートはダイビングの主要なサイトとなり、NAUIにとっても長く続く拠点となったのです。このコースでの優秀な合格者はウィリアム・アルスポー.Jr（NAUI＃730）でした。

1966年の理事会で、アル・ティルマンは次の候補者が見つかるまで会長兼事務局長として再任されましたが、最終的にはUNEXSOの規範により、アル・ティルマンはカリフォルニア大学教授としての地位と、NAUIにおける全ての管理職を辞任しなければならず、NAUI太平洋支部長には1964年のサンディエゴでのコースで優秀な成績を収めたアート・ウルリッチが就任し、事務局長にはジョン・C・ジョーンズ.Jrが就任しました。NAUI本部は最終的にはフリーポートへの移転計画のもと、フォートローダーデールへと移されたのです。

この時点でスキンダイバーマガジンとアル・ティルマンのNAUIでの主導的な役割は終了し、すぐにジョン・C・ジョーンズ.Jrもそれに続くことになりました。こうしてすでにNAUIを後にしていたニール・ヘスを含めて、NAUIの主要な創設者の時代から、新しい組織運営の時代へと移っていったのです。

NAUIのモットーはギャリー・ハウランドによって「Peace Through Air Power（航空戦力による平和）」を参考に考案された「Dive Safety Through Education（教育による安全なダイビングの実践）」となりました。飾り気のない標語でしたが、NAUIの精神にはぴったりの言葉でした。「Dive Safety Through a lot more Education（より多くの教育による安全なダイビングの実践）」という標語も、NAUIを表すのに適していたかもしれません。組織は、リーダーシップメンバー数の増加により、大きくなっていきました。インストラクター個人が力をもつ仕組みと、多くの支部の存在は、地域の需要をよりよく満たし、新しいリーダーシップを育てる効果的な方法でした。

日々の業務が続く中、競争の激しい組織の世界では、新たな課題が生じていました。NAUIと同様に全国規模の新しい組織も誕生し、NASDSはより多くのインストラクターを獲得していったのです。地域の教育プログラムは依然として高い誇りを抱いており、カナダ評議会においてNAUIにコースの評価のみを行い、実際にはコースを運営しないように求めてきたのです。

NAUIアフィリエイトインストラクタープログラムと呼ばれたプログラムは、批判が多く、このプログラムは凍結されてしまいました。このプログラムはNAUIコースに参加していないインストラクターで、地域に大きな影響力をもつインストラクターを取り込むために設計されていたものですが、プログラムが凍結される前に30人の素晴らしいインストラクターがNAUIへと参加したのです。コース要件は非常に厳しいもので、このコース合格者で、実力が不足していた人は1人もいなかったのです。

1962年～1965年の時代の終盤、かねてより既存の地方分権型の戦略に批判的だったアート・ウルリッチは、太平洋支部（依然としてダイビングにおいて最も人気のある地域だった）を拡大し、太平洋支部を中心とした中央集権型の戦略に戻すべきだと提案していました。一方、変化するNAUIの情勢に不満をもったラルフ・エリクソンは、シカゴでのコースを無断で中止し、U.Sダイバーズの器材セールスマンだったジョン・クローニンと共に1966年にPADIを設立したのです。

NAUIは新しい体制のもと可能な限り、基準とメンバーのスキルを維持しながら、インストラクターコースとそのランクを拡大させていく方針をとりました。そのため、NAUIは一種のフランチャイズプログラムに着手し、インストラクターコースをあらゆる場所で、異なるスタッフのもとで実施できるようにした結果、開催されるインストラクターコースは増え、参加者も増加しました。そして、より多くの収益が得られるようになり、NAUIは業務の増加に対応するため、コンピュータの世界に移行し、必然的に非営利の公共サービスとしての役割から、生き残るための事業運営に移行していく必要があったのです。NAUIがその後よりよい組織となったのか、それとも単に大きく複雑な組織になったのかについては、NAUIメンバーの間で今も議論が続いています。

「カード製造工場兼土産物店」という用語が、伝統を重視し、インストラクションの質が量の犠牲になっていると感じたインストラクターによって生み出されました。

ダイビングインストラクターの参加者を見ると、NAUIコースの成長を理解しやすいかもしれません。当時、アメリカはベトナム戦争の真っ只中にあり、若者の多くは戦地に向かい、ダイビングリゾートへの空の旅は完全には普及しておらず、経済的にも十分な余裕がない中においても、ダイビングはそれほど高価なものではなくなりました。指導はその中でも最も手に届きやすいものでしたが、ダイビングにとってはまだまだ厳しい時期だったのです。その他、全てのダイビングにおける指導に影響を与えたことは、大多数のダイビングコース参加者のアンケートにおける「コースの初めに十分に海洋でのダイビングができない」という内容の批判でした。

（現在では全てのプログラムにおいて、Cカードの発行前に複数回の海洋実習を実施するようになっています。）

1960年代の終わりには、2,000人近いNAUIインストラクターが活動しており、その数は驚異的な勢いで増えていました。ダイビングが1950年代の素朴で純粋だった時代から、1960年代に入りスリルを求める人々の娯楽となった時代へと移行する中で、NAUIは人々に必要な組織として誕生したのです。ダイビングリーダーが活躍する大木のようなNAUIは、その後数十年にわたって受け継がれています。組織や基準の変更、プログラムの多岐にわたる拡大など、様々な変化がありましたが、人々が未知なる世界への冒険を必要とする限り、NAUIにおける基本的な考え方は変わることはありません。

□　1966年～1969年のNAUI

ギャリー・ハウランドは、NAUI理事会による奨励金をアート・ウルリッチに支給し、彼を1964年6月のサンディエゴでのコースに参加させました。彼は物事を整理する優れた才能をもち合わせており、そのコースで彼はNAUIにまだ余裕があり、カリキュラムと組織はまだ発展途上であることに気がついたのです。アート・ウルリッチは公然とNAUI教材、テスト、コース管理者のデイブ・ウッドワードを批判しました。この批判は、彼が後にNAUIでのリーダーシップを発揮する序章でもあったのです。後にアート・ウルリッチはスクーバアメリカによるインタビューにおいて、「デイブ・ウッドワードに15回謝罪をしました」と語っています。

アル・ティルマンはアート・ウルリッチの批判とエネルギーを受け入れ、軍の機関と協力し、より効果的なテストを作成しました。この出来事はNAUIがコンピュータの世界への進出を行うきっかけとなったのです。アル・ティルマンと理事会が、NAUIの業務を各支部に分散し、本部をグランドバハマ島のフリーポートに移転することを決定した際に、アート・ウルリッチは太平洋支部のマネージャーに任命され、NAUIインストラクターの50%以上の管理を引き継ぎました。

アート・ウルリッチは理事会について「非常に保守的で、個人的な葛藤で対立し、現時点までの確立されたシステムに満足しているようだ」と考えており、彼は1966年の理事会に、デイブ・ポドウィッツと共に出席しました。彼らは招集されていたわけではありませんでしたが、理事会メンバーとなれる可能性を探っていたのです。ポドウィッツとユージン・ウィンターズによる支援を受けて、アート・ウルリッチは1967年までに理事会メンバーに就任することができました。本部を西海岸からジョン・C・ジョーンズ.Jrのいる東海岸へ移した後、NAUIは停滞期を迎えると同時にジョン・C・ジョーンズ.Jrは多くの個人的な問題を抱えていたのです。

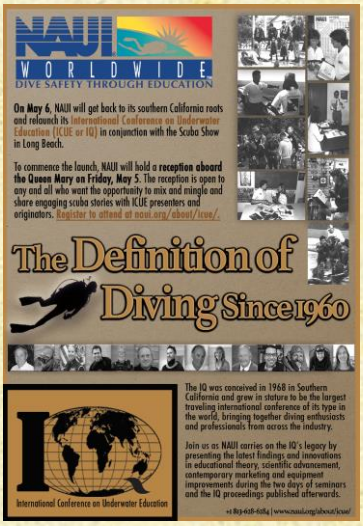
アート・ウルリッチはNAUI理事会の積極性に欠ける姿勢を疑問視していました。賠償責任保険、アルバイトによる業務の管理、不必要な記録の保管状況など、解決しなければならない問題がたくさんあったのです。また、年に3回のみのインストラクターコースではNAUIの発展は見込めず、市場の拡大が必要だと感じていました。

新しいプログラムのいくつかは、非常に有望なもので、アル・ティルマンとジョン・C・ジョーンズ.Jrはドナルド・ヒギンズとE.E.ホイシントンに働きかけ、NAUIをアメリカボーイスカウトの公式ダイビング指導機関とすることに成功し、全てのボーイスカウトにスキンダイビングの指導が奨励され、16歳以上のボーイスカウトにはNAUIスクーバトレーニングが提供されたのです。

1966年には8回のインストラクターコースが開催され、その数は翌年には24回に増加しました。ようやくNAUIが組織としてのまともな収益をあげられるようになってきたのです。1966年にアート・ウルリッチはNAUIにおける貢献を称えられ、エアマンオブザイヤーに選ばれました。空軍は彼の活動をサポートしており、彼に無償で空の旅を提供し、ダイビングを楽しむための休暇までもプレゼントしたのです。NAUIはアート・ウルリッチの活躍により急速に成長していきました。NAUIを複雑な官僚組織にしてしまったと批判する人も存在しましたが、ほとんどのメンバーは拡大するNAUIの方針を支持したのです。

彼は妻のグロリアを太平洋支部の非常勤スタッフとして採用し、この仕事は最終的に週40時間もの稼働を必要とするようになったのです。成長は急激で、NAUI理事会は1968年に合計9つの支部を設立することを決定しました。アート・ウルリッチはブルース・ハルステッド博士の研究をサポートするために、理事会を後にしたのですが、彼はオフィスをレンタルし、妻を常勤スタッフとして採用し、支部の売り上げを拡大させたのです。この成功により、アート・ウルリッチはNAUI副会長および事務局長として選出されたのです。

1969年までにNAUIはとても大きな組織になっており、その成長を管理する人材が必要でした。アート・ウルリッチは理事会に中央集権型のNAUI本部とゼネラルマネージャーの役職の設置を要求し、理事会はその要求を承認、アート・ウルリッチがNAUIの最初のゼネラルマネージャーとなったのです。1969年、NAUIインストラクターであるラリー・クシュマン（NAUI＃206）、ジョン・レゼック（NAUI＃949）、およびグレン・エグストロム（NAUI＃937）が力を併せて、第1回ICUE（国際水中教育者会議）またはIQ1として知られる組織を結成しました。1969年の理事会は、ベン・デービス（会長）、アート・ウルリッチ（副会長）、ジョー・ボドナー（秘書/会計）、W.H.ハリデー、J.F.ケイヒル、ジョン・C・ジョー



ICUE
（国際水中教育者会議）

■■■――

アート・ウルリッチ（NAUI＃601）

アート・ウルリッチは1936年にテキサス州サンアントニオにて、薬剤師と看護師の間に生まれました。彼は幼い頃より地域のプールに通い、7歳のときにはじめて自分専用のマスクとフィンを手にしました。1953年に結婚した彼は、1954年に空軍に入隊することを決断しました。4年後、彼はキースラー空軍基地に駐留することとなります。そこで彼は、ダイビングクラブの先駆けであったフィンツイスターに参加し、兄弟のような存在となるギャリー・ハウランド大尉に出遭ったのです。

アート・ウルリッチ（右）

彼は1964年～1977年の間、NAUIの運営に力を注ぎ、1978年にダイビングの世界を引退。その後は不動産業に従事したのです。

――■■■

□　1970年～1980年のNAUI

1970年9月、グレン・エグストロム（NAUI＃937）が会長に就任し、ラリー・クシュマンが副会長に、ジョセフ・ボドナー（NAUI＃9）が書記/財務担当に、そしてフランク・スカリーが理事会の新メンバーに選出されました。そして、1970年に日本で最初のコースを開催し、海を越えて拡大し、NAUIは国際的に成長し続けたのです。1972年、NAUI Canadaは独立した組織として設立され、最初のICCは1974年9月にメキシコで開催されました。1971年5月1日～8日、NAUIは医師にダイビングの医学的側面について教えることを目的とした最初のダイビング医学コースをバハマのUNEXSOにて開催しました。このコースはジョージ・ボンド、エドワード・タッカー、ジョン・クレメンツなどの著名なダイビングの専門医たちによって指導され、医師のみが参加でき、ダイビング認定を受けていない医師は基本的なスクーバの指導を受けたのです。また、NAUIはCMASとも連携し、スクーバダイビング部門のアメリカ合衆国代表にもなりました。

グレン・エグストロム

ジョセフ・ボドナー

1970年代はNAUIが継続的にグローバル規模の展開を行った時代です。ダスティ・ロードス（NAUI＃179）は、タイに住んでおり、YMCAインストラクターコースを指導していました（当時の規定ではITC開催にはNAUI本部の代表の立ち合いが必要だったため、彼はITCを開催することができませんでした）。YMCAコースを指導している間も、ダスティ・ロードスは常にNAUIに忠実であり続け、タイでITCを開催できるようにNAUIに請願し続けた結果、新しい支部の規定が誕生し、彼はついにタイでのICC開催を認められたのです。現在では生粋のNAUIインストラクターたちがタイで活躍していることでしょう。

ダスティ・ロードス

アート・ウルリッチは1970年～1975年まで、NAUIを多少なりともリスクのある方向へと進ませたのです。数字こそが彼の指標であり、NAUIは1960年代に高い評判を得たため、1970年代の最初の数年間は業界でトップでした。

NAUIのコースと教材の数は急増し、組織を健全に運営するには巨大になりすぎていたかもしれません。アメリカは不況により後退感が蔓延し、それに伴いNAUIの評判と数字も下降していったのです。

実際、1970年にNAUIは1度破産しかけ、ビル・ハイは彼の資産のうち2千ドルを従業員への給与の補償とNAUI存続のために、アート・ウルリッチへ寄付したのです。ビル・ハイは後に「NAUIは低価格でのダイビングコース参加者の認定と、その後の顧客のつなぎとめがうまくいかないことで、破産しかけていました。彼ら（NAUI）の業務は増大したかもしれませんが、彼らの組織自体が拡張し成長しなければなりませんでした。」と語っています。

4人の重要なスタッフであるアート・ウルリッチ、エド・カーガイル、ジョン・ハーディ、グラバーによってNAUIダイバーズアソシエーション（NDA）が起案されました。ダイビングの指導が組織として確立した最初の頃からの問題は、どのようにしてダイバーを最初の講習から次につなげるのかということで、ダイバー同士が「ダイビングに行こうよ」と声を掛け合うことは期待できなかったのです。

ロサンゼルス郡のプログラムも同様の心配を抱いており、対策としてアドバンスダイバープログラムを策定していました。同じ考えが、元海軍であり、スポーツ、化学分野、軍隊、商業など、様々な分野でのダイビングを経験したエド・カーガイルによってNAUIにもたらされたのです。NAUIは、ダイバー資格取得者に年間20ドルで継続的にダイビングにかかわり続けることができる仕組みを提供しはじめました。これらには雑誌「ダイバーズワールド」の購読、全国で開催される水中写真、海洋生物学、沈船、ナイトダイビングなどについてのセミナーへの参加費などが含まれていたのです。

各支部長が募集を開始し、エド・カーガイルはダイビングの様々な分野の専門家を集め、セミナーを開きました。セミナーには毎回300名～350名のNDAとNAUIのメンバーが集まりました。ダイバーにとってはお得な価格でしたし、NAUIにとっても経済的な助けになったのです。エド・カーガイルは1972年～1974年の任期の間、NDAの発展に努めました。NDAは現在に至るまで、一定のペースで増え続けましたが、ダイバーの引退は依然として業界および特にNAUIでの課題です。

1975年、NAUI理事会はNAUIの失速が経営の責任であると感じ、改革を行い、アート・ウルリッチは特別企画運営者へと降格し、ジョン・ハーディは経営側へと昇格したのです。こうしてアート・ウルリッチはNAUIでの役割を終え、カリフォルニア州ウィルミントンのダイビングセンターでトレーニングディレクターとしての活動をはじめたのです。彼は1977年までNAUI理事会に残りましたが、古いダイビングクラブのようにNAUIを運営する時代は過ぎ去り、アート・ウルリッチのよ

うな偉大な経営者も、業界の新しいビジネスマンに権力を譲らなければならなかったのです。ビル・ハイはグレン・エグストロムの後任として理事会の会長となり、理事会はその人数を7名～9名へと増やすことにし、理事は、地域ごとの情勢を効率的に反映させるために、それぞれ異なる地域から選ばれる仕組みになりました。

■■■――

ジョン・ハーディ（NAUI #1002）

ジョン・ハーディは1938年にカリフォルニア州グレンデールに生まれました。彼にとって最初の水泳テストの結果は落第でした。彼は素朴なごく普通の男で、子供の頃、ジャック・イヴ・クストーの「静寂の海」を読み込み、10代の頃にはスキン・スクーバを上手にこなすようになっていました。ジョン・ハーディは普通の水泳よりも、スクーバでの潜水を好んだのです。彼はカリフォルニア州で、メル・フィッシャーのアクアショップで中古のレギュレータを購入し、そのアクアショップで3時間のコースを受講しました。

長距離走の経験者として、ジョン・ハーディはスキンダイビングの中に孤独と苦痛の存在を感じていましたが、それでも彼はスキンダイビングを愛し、全国YMCAスクーバプログラムではインストラクタートレーナーとしての役割を果たしたのです。彼はカタリナ島のキャンプフォックスの若いマネージャーとして、日々ダイビングに勤しみ、ほとんどダイブテーブルを気にすることなくダイビングを行い、毎回40m近い水深まで潜っていました。

ジョン・ハーディはレクリエーション管理の学生として、カリフォルニア州立大学においてアル・ティルマンの指導を受け、また、ロサンゼルス郡のプログラムに参加しており、21歳のときにはインストラクターとなったのです。当時NAUIは、効率的に運営できる能力があったことから、NAUI認定のインストラクターであり、海軍将校として兵役に就いた経験がある彼は、1971年～1972年にNDAを結成する特別プロジェクトマネージャーとして採用されました。ある日、彼は運営上の決定に意義を唱え、しばらくの間NAUIを離れ、ダイビングに専念することにしていました。しかし、彼の唱えた異議は無視されることなく、NAUIで行動する機会を得て、1975年～1979年の間、ゼネラルマネージャーとして活動したのです。

ジョン・ハーディは、NAUIにおいてリーダーシップを発揮し、他のリーダーが従うべき見本となり、プログラムの重点を認定することから、トレーニングを行うことに変えていきました。認定が重視されなくなり、インストラクターやダイバーコースの参加者のトレーニングを重視していったのです。

――■■■

ジョン・ハーディは1970年代初頭にグレン・エグストロムのもと、NAUI本部へ理事会メンバーとして参加し、ゼネラルマネージャーのアート・ウルリッチによる経営方針と対立したのです。このような上層部での対立は、NAUI設立時からの悩みの種でした。ジョン・ハーディは後に、「理事会メンバーは夢見がちで、その中の何人かは理事として長くとどまりすぎている。」と語っています。また、ビル・ハイは各メンバーが個人個人の関心のあるプロジェクトを追求してばかりいることが、対立の原因だと指摘していました。

組織が大きくなるにつれて、トレーニングの質の管理は難しくなりますが、質こそがNAUIの評判を支える核であることに変わりはなかったので、この年代はNAUIにとって難しい時期でもありました。ジョン・ハーディは、「ダイビングとNAUI」そして「経営手腕」の両方を持ち合わせていましたが、過去にNAUIが経験した全ての失敗に「経営手腕の欠如」を当てはめることができるでしょう。素晴らしいアイデアは豊富にありましたが、それらを実行するための予算や運用手順を正確に管理できる人材がいなかったのです。

ジョン・ハーディは、大きな赤字と向き合わなければなりませんでしたが、果敢に挑戦し続けたのです。NAUIは非営利組織とボランティアの精神が根底にあったため、常に資金不足に悩まされていました。他のダイビング指導機関の運営方法は、全てビジネス的な方向性であり、非営利であろうとなかろうと、多くの人は「ビジネスのように」運営しなければ生き残ることができないと感じていたのです。

1972年～1973年、NAUIは8万3千人のダイバーを認定しました。そこでラリー・クシュマンは、NAUIが継続的な教育をそれらのダイバーに販売するべきだと考え、それがNAUIにとっての資金源となったのです。

ジョン・ハーディは1971年～1973年の間で1度任期を終え、1974年に理事会に呼び戻されるまでNAUIを離れました。彼は理事会が決議した「NDAは詐欺的」という内容と、教材作成のために理事会がジェッパーソン社と結んだ50万ドルの契約（当時のNAUIの年間収入は40万ドル）を痛烈に批判していました。ジェッパーソンはその後債務不履行に陥り、NAUIは損失を出したのです。

1970年代、NAUIは予算を適切に確保することに苦労しており、収益を上げるための事業で更に借金を生み出していました。また、業界ではロサンゼルス郡やフロリダなどの主要な地域での新しい法律によって、いくつかのダイビングショップが廃業に追い込まれてしまったのです。この法的な問題との戦いは、NAUIや他の組織にとって、金銭的な負担を強いるものでしたが、ダイビング指導機関同士のかかわりを深くする役割を果たしました。

1970年代をとおしてのもう1つの重要な問題は、認定インストラクターがどのような環境で指導を行うかということでした。YMCAは1950年代からダイビングクラブでの指導を提唱し、PADI とNASDSはダイビングショップを適切な指導場所だとみなしました。NAUIは学会的な思考のグレン・エグストロム、リー・サマス、ジョン・クラマーのもとで、学校との取り組みこそがNAUI発展の鍵であると考えたのですが、後から振り返ってみると、これは正直なところ誤算であったように思います。確かに、学校との取り組みには尊厳と品質の保証がありましたが、この時点ではNAUIは誤った方向を向いていたのです。ダイビングショップは人目のつきやすい道路に面しており、とおりかかる人は安心感と親しみやすさを感じ、コースへの参加を提案するのに適した場所だったのです。また、NAUIは他のダイビング指導機関に比べて遥かに高い基準を設定しており、その信頼を守るために引き続き質の高いインストラクターの教育に力を入れていましたし、NAUIのダイバー認定を受けた誇りのあるダイバーたちはプログラムの難易度が下がるのを喜びませんでした。しかしながら、NAUIの多くのインストラクターが、PADIやNASDSのプログラムを開催するために、クロスオーバーコースに参加したことも事実です。

1974年には、インストラクターの認定に関するいくつかの大きな変更が行われました。ICCはアシスタントインストラクターを認定するIQCと、それに続いてインストラクターを認定するITCへと変更され、主な水中技能のテストはIQCで行われており、ITCでは参加者の基本的な技能を試すことよりも、インストラクターをトレーニングすることに力を入れていました。

1970年代、女性にとってもダイビングが参加しやすいものになってきました。ゼール・パリーやヘレン・ドレウ、ナンシー・ギル、ノーリン・ロウスなどの先駆者たちは時代を先取りしており、1975年にジャンヌ・スリーパーはインストラクタートレーニング部長としてNAUI本部に入社したのです。彼女はシーハントを観てダイバーになることを決断し、最終的にミネソタ大学でダイバーとしてトレーニングを行い、最初の女性ITCディレクターとなりました。その後、NAUI中西部支部を運営し、このことは女性をNAUIの潜在的リーダーとして確立させたのです。更に重要なことは、ダイビング全般においても、女性が目立ち、尊敬されるようになったことです。

ジャンヌ・スリーパー

1974年、デニス・グレイバーはジェッパーソンとの取引が失敗に終わった後、NAUIの教材をまとめるため、NAUI本部で業務をはじめました。彼はまもなくPADIの教材作成を支援するためにNAUIを離れ、その後1985年に彼が戻ってくるまで、NAUIにはダイブショップに大きくアピールすることができる教材がない状態だったのです。

ビル・ハイ（NAUI＃175）がNAUI理事会の会長に選出された1976年までに、約5,000名のNAUIインストラクターが認定され、70年代の終わりまでにその数は5,704名となり、インストラクター認定が可能な年齢は21歳から18歳に引き下げられたのです。

NAUIは1970年代の終盤に差し掛かっても多くの財政問題を抱えていました。多くのインストラクターは、組織の将来について心配しており、1979年、一部のNAUIインストラクターたちがこの状況を克服するため、UNEXSOを運営した経験のあるジョン・イングランダー（NAUI＃1148）と連絡をとりました。同年ジョン・イングランダーは理事へと立候補しましたが、落選。それでも翌年理事へと就任することに成功し、その後会長としても活躍したのです。ジョン・イングランダーはNAUIを財政的に、そしてNAUIという組織の思想も救うことになる人物となったのです。

1979年、ジョン・イングランダーは会長のビル・ハイ、ゼネラルマネージャーのケン・ブロック（1979年にジョン・ハーディの後任として就任）と共に、日本でのコースを監督していましたが、このとき誰も組織が20万ドルの負債を抱えていることに言及していませんでした。これはメンバーによる民主主義的な組織の良い面と悪い面を表しており、選挙による理事の選出は腐敗を防ぎますが、同時に安定的なリーダーの存在と継続的な取り組みの追求が、説明責任と共に失われることを意味しているのです。

1970年代のNAUIを要約して表現するとすれば、この素晴らしいダイビング指導機関は、財政的にも経営的にも組織が耐えることができる以上の速さで成長していったといえるでしょう。よいアイデアは善良な心によって考え出され、試されてきました。NDAや最高の教材を思い描いたジェッパーソン計画、基準の継続的な改革、学校との取り組みなどがあげられますが、アイデアがとても多く、理事会とスタッフの間でも意見の相違が多発したのです。財政的な課題や法的な課題、巨大な同業他社の成長などにも直面しましたが、その全てに向き合いNAUIは成長し続け、様々なリーダーが誕生し、この時代でも一般の人々はNAUIという言葉を耳にしたときには「クオリティ」を連想させていたのです。

□　1980年～1990年のNAUI

1980年3月の理事会で、ジョン・イングランダーが会長に選出されました。NAUIには悲壮感が漂っており、破産寸前であると思っている人も多く、彼がNAUIの財政状況を好転させるための経験と意欲をもっていると感じた複数の理事会メンバーに後押しされ、その地位に立候補したのです。ジョン・イングランダーは、ダイビング業界における一流の財務マネージャーとして名声を得ており、1973年にUNEXSOの管理職として採用され、アル・ティルマンがUNEXSOで夢見ていた多くの独創的なアイデアを維持しながら、非常に成功したビジネスを構築することができたのです。1980年までに、NAUIとUNEXSOはほぼ同じ規模となったのです。

■■■――

ジョン・イングランダー（NAUI＃1148）

ジョン･イングランダー

ジョン・イングランダーは、ダイビング業界における第2世代の素晴らしいリーダーであり、1968年、彼が18歳のときにUNEXSOでのNAUI ICCに参加していました。4年後、ペンシルバニア州カーライルのディキンソン大学において、地質学と経済学で理学士号を取得し、卒業後すぐに、彼はインストラクターとしてUNEXSOに戻り、2年以内に組織を統括するようになったのです。

ジョン・イングランダーはUNEXSOに最高のタイミングで復帰しました。アル・ティルマンが投資家の支援不足のために組織の株を売却した後、UNEXSOはデイブ・ウッドワードに引き渡されましたが彼もまた、アル・ティルマン同様支援不足に苦しんだのです。ジョン・イングランダーは、倒産寸前のUNEXSOを買収し、経営状況を好転させるプログラムを実施し、アル・ティルマンが1960年代に想定していた基準に戻す一方で、初めて事業としての収益性を上げたのです。

ジョン・イングランダーはこの実績により、ビル・ハイによって進められていたNAUIの財政再建を完了させるために、NAUI理事会へと就任したのです。

また、ジョン・イングランダーは、バハマダイビング協会（BDA）の創設会長でもあります（BDAとは、バハマでのダイビングを促進するために協力するダイビング事業者とチャーターボートの組織）。

――■■■

理事選の前夜、当時の会長であったビル・ハイは、ジョン・イングランダーとともにNAUIの将来と当時NAUIが抱えていた問題について長い時間話し合いました。NAUI倒産の危機を乗り越えた仲間として、2人は長年のよい友人であり続けています。

ジョン・イングランダーはNAUIの財政状況を好転させるため、1年間の期間が必要だと宣言しましたが、それはジョン・イングランダーが完全な主導権をもっている場合にのみ達成可能だったのでしょう。実際には完全に財政を改善させるにはジョン・イングランダーは18か月必要としましたが、1980年末までにNAUIの財務諸表は9万ドルの黒字を示したのです。

ジョン・イングランダーは会長として熱心に働き、文字どおり「本部の住人」のようになっていました。全ての詳細を調べ、原価計算を行い、費用のかかるプロジェクトを排除したのです。また、マーシャル・マクノットが業務執行取締役として参加しました。マーシャル・マクノットはダイビングの業界経験なしでやってきた最初の執行役でした。彼は資金調達のプロとしての経験があり、財政状況改善への取り組みは非常に厳格に行われました。NAUIメンバーの中には状況の改善は、経済向上によって何年も前にはじまり、優れた教材により競合を押し返したと考える人もいます。いずれにせよ、改善は必然であり、NAUIには価値のある商材があったのです。

NAUIは、新たなスタート、新たな外観、新たな本部を必要としており、1981年、NAUI本部はカリフォルニア州モントクレアのアローハイウェイにある新しい建物に移転しました。NAUIは他のダイビング指導機関の動きにも寛容でした。結局のところ、多くのダイビング指導機関はNAUIがつくり上げた教材や仕組みを採用しているのです。NAUIの最大のライバルのダイビング指導機関の最初のコースは、NAUIが計画していたコースの資料と参加者リストを使用して開催されたことは、あまり知られていない事実です。そのコースでは、NAUIのロゴが消された資料にライバル組織の名前が上書きされただけだったのです。

■■■――

ラリー・クシュマン（NAUI＃206）

スクーバアメリカのインタビューで、ラリー・クシュマンは、彼とNAUIとのかかわりを語っていました。「私のダイビング人生の中で、NAUIとのかかわりほど充実したものはありませんでした。NAUIは誕生したときから純粋できれいな素晴らしい思想であり、人々を心から気遣い、ダイビングを安全なスポーツとして守る数人のダイバーから生まれました。競争にのまれ、大きく成長しようとしたときに

は間違いもありましたが、NAUIの使命についての創設者の当初の考えに立ち返ると、空気をきれいにするのは簡単でした。」

――■■■

NAUIをコンピュータ時代に持ち込もうとする試みは1963年に遡りますが、実際に変化が起きたのは1983年でした。最初の2つのコンピュータシステムはおそろしく不便なものでしたが、それでもNAUIは効果的に営業し続けたのです。営利、非営利にかかわらず、日々成長していく現在の世界で誰もが経験しているのは、技術の進歩に歩調を合わせる努力をするか、時代に取り残されて衰退していくかということです。NAUIでは、どういうわけか、最悪の状況でも常に救いの手があり、ときには献身的なメンバーからの寄付もありました。ベン・デービスは、「どんなに暗い状況でも、NAUIの輝きは消えることはありません。そして、同じ仕組みをとおしてNAUIメンバーとなった私たちの絆を、皆誇りに思っています。」と語っています。

1983年、NAUIニュースは廃止され、NDAニュースが作成されました。新しいNDAニュースは、NAUIと協力組織であるNDAとの共同の取り組みでした。NAUIニュース廃止の理由は、NDAの組織形態により、NDAニュースをより低い郵便料金で発送できるようになったためです。

1985年、デニス・グレイバーはNAUIに戻り、1982年にPADIで行ったことと同じ簡単な組み立て式のトレーニングプログラムをまとめました。そのアイデアはジョン・クローニン、ディック・ボニン、ポール・チモロス、デニス・グレイバーが集まって「誰かにダイビングを教える最も簡単な方法は何か」という議論から生まれたものです。これは独立したインストラクターだけでなく、ダイビングショップによりよいサービスを提供するために、NAUIを有利な立場にし、テッド・ボーラーのNAUIプロマニュアルは、ダイバーをいちはやく効果的に水中に連れて行くための指示、いわば地図を標準化する確実で普遍的なテキストとなったのです。テッド・ボーラーはまた、ナイトダイビングのようなダイビングに関するシンプルで効果的な専門小冊子をつくりました。周りには常にマニュアルや資料がありましたが、その多くは複雑すぎて、理解して使用するには多くのトレーニングが必要だったのです。

統一されたトレーニング基準が策定されはじめ（1970年代の法的な壁の出現に後押しされたため）、NAUIは全米水泳協会と緊密に連携して、米国全体のトレーニングの標準化を支援しました。

1985年にRecreational Scuba Training Council（RSTC）は、エントリーレベルの認定のための最低限のトレーニング基準を策定し、NAUIは他のほとんどのダイビング指導機関と同様に、1986年に業界トレーニング基準を採用したのです。これらの基準では、ダイバー認定のために4回の海洋実習とその他の最低要件が必要でした。

RSTCロゴ

サム・ジャクソンは1987年に事務局長になり、NAUIがダイビング業界にもたらしたリーダーシップとしての役割を大きく示しました。 彼は理事会からの干渉がないことを条件にNAUI本社にやって来て、NAUIの新たなスタートを切り、経済的な洞察力を駆使し、コンピュータを導入し、多かれ少なかれNAUIが21世紀の世界に入る準備を行ったのです。NAUIメンバーは、ナンシー・グァラシオを1987年に理事会の会長に選出し、彼女はNAUI初の女性会長になったのです。

ナンシー・グァラシオ

■■■――

サム・ジャクソン（NAUI＃2972L）

サム・ジャクソンは1971年にNAUIインストラクターになりました。彼はダイビング業界に来る前に、コンピュータ関連会社のマーケティングを行っており、彼はNAUIの新たなリーダーとして最適な人材で、並外れた記録でNAUIの価値を高めたのです。カリフォルニアでNAUIの事務局長を務める前は、NAUIカナダの社長を務めていました。 NAUI事務局長としての職務を受け入れた後、彼は8年間もの歳月、不安定な年や激しい競争を乗り越えてNAUIに安定をもたらしたのです。その献身的な努力は、1995年5月にダイビング器材・マーケティング協会（DEMA：Diving Equipment and Marketing Associaiton）の事務局長として勧誘されたときに報われました。

――■■■

1989年、NDA NewsはSourcesマガジンに変更されました。

□　1990年代とこれから

1990年代の半ばに入り、NAUIがその使命を果たしたのか、そして新たな高みへと飛躍することができるのかを考えてみると、17,000人以上の認定インストラクターと、最高の指導を受けた何百万人もの認定ダイバーを大変誇りに思うことができるでしょう。 もっと重要なことは、NAUIはダイビングを日常から外れた表面的な体験にすることは決してないということです。財政的な困難を乗り越えるとき、NAUIの使命を守ることは容易ではありませんでした。現在のダイバーを、初期のダイバーと比べてみると、彼らは学科やダイバーとしての心構えにはあまり関心がなく、ダイビングを早く済ませて、認定を受けることを重視しているかもしれません。新しいダイバーの中には、カラフルで技術的に多少進歩した流行りの器材を重視し、あまり努力をせずにダイビングを楽しもうという考えをもつ人もいるかもしれません。人々の中には「堅苦しい説明じゃなく、ただ器材を装着するのを手伝って」という態度が溢れています。トム・ティルマンは、1980年代半ばに父と出かけたカタリナ島への旅行中、海岸に腰を下ろしていたときのことを次のように回想しています。「私は父が丸一日の講習を終えて陸に上がり、腰を下ろしてこう言ったことを今でも覚えています。『器材を郵送で送ってしまった方がよいかもしれないね。今のダイバーは、ダイビングでの冒険なんか気にしていないんだ。カラフルな器材の組み合わせや、誰がいちばん高価な器材をもっているかが重要みたいだよ。』その観察はダイビングの化石のような父だからこそできたのでしょう。そして、それはダイビングという活動がどのように変化したかをよく物語っていました。」

チャック・ブラケスリーの目には、新しい時代のダイバーはどのように映っていたのでしょうか。チャック・ブラケスリーは「彼らはスペースを埋め尽くし、遊園地のように列をつくっていました。タホ湖にある私が気に入っている場所に行くと、そこでは200人程のダイバーが駐車場を埋め、湖に入る準備をしており、一部の人は、昔のダイバーに比べると随分と貧弱に見えました。」と語っています。

今やダイビングは新興市場であり、それは裕福な団塊の世代、大学生、単にスリルを求める人、リゾートでのダイビングのための準備をしている人、テレビに憧れてやってきた人などで構成されており、かつての安価でとりつきやすかったダイビングではなくなっていました。

ダイビングは今でも多くの人々の関心を集め、海へと誘いますが、人々の関心を維持し、より高いレベルの知識を彼らに与えることは、全ての組織の課題であり続けています。参加者へのトレーニングの質は、彼らの情熱と継続的に学ぶ時間を決定します。

トム・ヘンフィル（NAUI＃2491）は、インストラクターコースの参加者でさえ、現在と初期のNAUIでは大きく異なると述べています。昔のインストラクターは、水中世界への冒険を共有し合うことを喜んでいました。インストラクターになって、リゾートに行き、尊敬されるインストラクターとしてガイドを行うことも彼らの喜びだったのです。

トム・ヘンフィル

トム・ヘンフィルは地域でのダイビングに再び魅力をもたせることが必要と考えています。冷たい水や、限られた視界であっても、ダイビングを楽しめるダイバーを増やすべきなのです。当時のハロウィンでも、トム・ヘンフィルは水中カボチャ狩りを開催しました。ダイバーは自分が獲得した器材やスキルを使う機会ができることを、大きく喜んでいたのです。

1990年代はダイビングにおける教育の新時代でした。1963年にアル・ティルマンが最初に政府のコンピュータを使用してNAUIテストを改善するようアート・ウルリッチに依頼して以来、テクノロジーは成長し続け、コンピュータの世界とNAUIとのかかわりはより大きくなったのです。1994年、NAUIはCD教材を導入後、通常の学習コースの補足として他のNAUI教材でも導入していきました。

マイク・ウィリアムズの指揮のもと、ウォリー・バーンズの助けを得て、NAUIは Worldwide公式WEBサイトを作成し、インターネット上で強力な存在感を示した最初のダイビング指導機関となったのです。

また、環境問題はNAUIとアメリカ全体にとって大きな関心事となっています。NAUIは、1992年1月17日に環境保護活動の支援における第一歩として、NOAA（National Oceanic and Atmospheric Administration:アメリカ海洋大気庁）と環境管理協定に署名しました。この合意は、NAUI事務局長サム・ジャクソン、ヒラリー・ヴィダーズ博士、NAUIの環境部門、およびNOAAのトゥルディ・コックスとビル・ハリガンによって署名されたのです。

1994年、NAUIはNDAを廃止し、国際水中基金（IUF）という名前で再編成されました。これにより更に減税が可能となりましたが、全てのダイバーのための教育と意識を継続するという当初の使命は続いています。

35年以上にわたるNAUIの本質は、尊厳と誠実さを備えた組織の一員であるという考えが、深く根づいていることにあり、その所属の誇りは、ダイビング業界の動向に大きな影響を与える力として、私たちを結びつけます。NAUIの使命は可能な限り最高の教育を大衆に提供することであり、初心者から上級者まで、ダイバーの

安全と幸福が保護されることが、当初から明確に示されていました。NAUIのインストラクターになるとことこそが、ダイビングを学ぶために最も効果的な手段と言えるでしょう。

　現在、活躍するインストラクターや、その後に続くインストラクター全員が、NAUIの歴史における次章のパイオニアになるのです。ひとりひとりが新たな歴史の主役として、NAUIという組織のもとに協力することで「教育を通じた安全なダイビング」を強く推進し続けることができるのです。

本書はアル・ティルマンのご子息トム・ティルマンが記述したものを株式会社ナウイエンタープライズが抄訳したものです。